

北原・萩林遺跡

－介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

二〇一二年

医療法人関越中央病院 株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

2012

医療法人関越中央病院
株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

北原・萩林遺跡

－介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2012

医療法人 関越中央病院
株式会社 シン技術コンサル
高崎市教育委員会

例 言

1. 本書は、医療法人開越中央病院による介護施設建設に伴い実施された、「北原・萩林遺跡」（高崎市道跡番号 516）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在は、群馬県高崎市北原町字萩林 169-2・178-4・178-5・179-180-2・181-1 番地である。
3. 発掘調査面積は、約 290m²である。
4. 発掘調査は、平成 23 年 7 月 11 日から平成 23 年 8 月 18 日まで実施した。
5. 発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導・監督の下に、事業者と委託契約を結んだ株式会社シン技術コンサルが実施した。
6. 調査体制は以下のとおりである。

高崎市教育委員会	株式会社シン技術コンサル
田口一郎	調査担当 吉澤 学
滝沢 匡	測量担当 志村将直
須田奈保子	成田徹人
7. 本書の編集は吉澤・坂本勝一（株式会社シン技術コンサル）が行った。執筆は第 1 章を田口、他を吉澤が行った。
8. 本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成に従事した作業員は以下の通りである。（敬称略・五十音順）
阿部加平、岡田広志、岡田 勝、串刈春江、斉藤昭夫、佐藤貞夫、高橋孝子、星沢綾香、星野芳彦、森下綾子、山田友子、山本芳子
10. 発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略）
医療法人開越中央病院、山下工業株式会社、細谷印刷株式会社

凡 例

1. 本書掲載図に使用した地図は、第 1 図が平成 2・10 年・国土地理院発行 1/50,000 地形図「権名山」・「前橋」、第 2 図が昭和 7（1932）年・大日本帝国陸地測量部発行 1/25,000 地形図「前橋」、第 3 図が平成 14・22 年・国土地理院発行 1/25,000 地形図「渋川」・「前橋」である。
2. 遺構配置図の座標については、世界測地系に基づく平面直角座標第 IX 系を使用した。また、遺構平面図に示した方位は、座標北である。
3. 遺構図中におけるトーン■は焼土範囲を、遺物図中におけるトーン■は煤範囲を示している。
4. 土層の色調は「標準土色帖」（農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所色票監修 2002 版）による。
5. 火山噴出物の表記は略号を用いた。浅間 A 軽石 = As-A、浅間 B テフラ = As-B、浅間 C 軽石 = As-C、浅間黄色軽石 = As-YP である。
6. 遺構の略号は、竪穴住居跡 = S I、土坑 = S K、溝跡 = S D、ピット = Pit とした。
7. 本書掲載の遺物 No は挿図・観察表・写真図版全て統一しており、掲載縮尺も挿図・写真図版ともに 1/3 を基本としているが、これと異なるものについては個別に縮尺を付してある。

目 次

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査の方法と経過	2
第3章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第4章 基本層序	9
第5章 検出された遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡 (SI)	10
(2) 土坑 (SK)	23
(3) 溝跡 (SD)	24
(4) ピット (Pit)	25
(5) 遺構外出土遺物	25
第6章 まとめ	28
第1節 住居跡出土土器について	28
第2節 北原・萩林遺跡の集落について	30

写真図版

抄 録

挿図目次

第1図 北原・萩林遺跡位置図	1	第14図 SI3 遺構図-2	19
第2図 北原・萩林遺跡遺構配置図	3	第15図 SI4 遺構図-1	20
第3図 1929 (昭和4) 年の遺跡地周辺	4	第16図 SI4 遺構図-2	21
第4図 周辺遺跡分布図	6	第17図 SI4 出土遺物実測図	22
第5図 基本層序図	9	第18図 SK1~5 遺構図・SK2 出土遺物実測図	23
第6図 SI1 遺構図	11	第19図 SK6~10 遺構図	24
第7図 SI1 出土遺物実測図	12	第20図 SD1 遺構図	24
第8図 SI2 遺構図-1	13	第21図 Pit1~4 遺構図	25
第9図 SI2 遺構図-2・出土遺物実測図-1	14	第22図 遺構外出土遺物実測図	25
第10図 SI2 出土遺物実測図-2	15	第23図 土師器坏集成図	28
第11図 SI2 出土遺物実測図-3	16	第24図 須恵器坏・坏蓋・高坏集成図	29
第12図 SI3 出土遺物実測図	17	第25図 周辺の7世紀後葉~8世紀初頭の住居跡	31
第13図 SI3 遺構図-1	18	第26図 周辺遺跡の仏林と佐波理跡	32

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	7	第6表 SK 観察表	23
第2表 SI1 柱穴観察表	11	第7表 Pit 観察表	25
第3表 SI2 土坑観察表	14	第8表 北原・萩林遺跡出土物観察表-1	26
第4表 SI3 土坑観察表	18	第9表 北原・萩林遺跡出土物観察表-2	27
第5表 SI4 柱穴・土坑観察表	21		

写真目次

PL.1 調査前現況・同遺景・調査区 全景・基本土層	PL.4 SI4	PL.7 出土遺物-SI1・2 (1)
PL.2 SI1, SI2 (1)	PL.5 SK1~8	PL.8 出土遺物-SI2 (2)・3・4 (1)
PL.3 SI2 (2), SI3	PL.6 SK9・10, SD1, Pit1~4	PL.9 出土遺物-SI4 (2), SK2, 遺構外

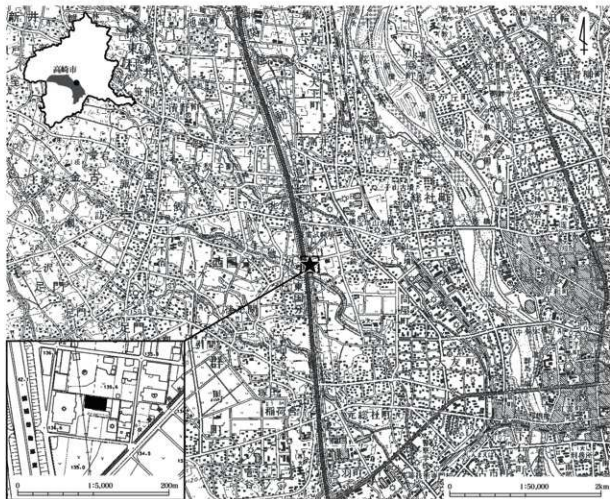
第I章 調査に至る経緯

平成22年7月、新進物産株式会社(以下事業者)より高崎市教育委員会(以下市教委)に特別養護老人ホーム予定地内の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地の西側隣接地で関越自動車道建設に伴う北原遺跡・国分境遺跡において、古墳～平安時代の集落遺跡や古墳時代の水田遺構等が調査されており、周辺地域にも拡がる可能性が大きいため、試掘調査による確認を行うことと、その結果による工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年8月10日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年9月14・15日に工事予定地の試掘調査を実施し、駐車場として利用されていた部分を中心に古墳時代の竪穴住居跡と推定される遺構を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行なった。その間、事業主が医療法人関越中央病院へ変更があり、建物設計の変更もあった。最終的な建設計画に基づく協議により、老人ホーム建設部分で遺構が残存する範囲の記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、株式会社シン技術コンサルに委託して実施することとなり、平成23年6月27日付けで高崎市長・関越中央病院・シン技術コンサルの三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成23年6月27日付けで関越中央病院とシン技術コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図 北原・萩林遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の調査は介護施設建物部分のうち、試掘調査で遺構の存在が確認された約440㎡を当初の調査範囲に設定していた。しかし表土除去の結果、調査区内の中央部付近が広範囲で擾乱されていることが判明したため、最終的にこれを除く約290㎡を調査対象とした。この擾乱部分についてはあらかじめ重機で掘削を任意の深さまで行い、遺構の有無を確認した上で排土によって埋め戻した。

調査地の現況は、人の背丈程のアカザ・ヨモギなどが生い茂る雑草地であったため、作業はその伐採から開始した。表土除去についてはバックホウを用い、擾乱の掘削も同時に行った。この時点で生じた排土はダンプで調査区の南西側に移動し、敷地内に仮置きした。遺構が構築されている黒褐色土(As-C混土層)検出後は、まずジョレンおよびスコップで層上面の精査と、重機での掘削が不可能な小規模な擾乱を人力で掘削し、平面と断面の両方から遺構確認を行った。これにより検出された遺構は、移植ゴテ等で掘削、調査した。なお、表土除去から遺構掘削までの作業は基本的に東側から着手し、西側へと進めていった。また、全ての遺構調査が終了した段階でラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施し、調査区全体の撮影を行った。

作図作業は断面図を手実測、平面図をトータルステーションによる器械実測で行った。遺物微細図などについてはデジタルカメラによる写真図化も併用し、これらの取得データはいずれも最終的にコンピューター上で処理・編集した。

写真記録については35mmカメラによる撮影を基本とし、フィルムはモノクロネガ・カラーリバーサル の2種類を使用した。また、デジタルカメラによる補助的な撮影も併せて行った。ラジコンヘリコプターによる空中撮影には、6×6判カメラを用い、フィルムはモノクロネガ・同カラーリバーサルフィルムを使用した。なお、空中撮影においてもデジタルカメラでの補助撮影を実施している。

調査の経過は、下記の通りである。

平成23年

- 7月11日 仮設トイレ・調査器材搬入。テント設置。雑草伐採作業。
- 7月12日 表土除去開始。調査区外周安全柵設置。東部遺構確認。
- 7月13～15日 中央部遺構確認。SI1・2、SK1～6、SD1、Pit1調査。14日表土除去終了。
- 7月19・20日 19日に台風対策の養生作業実施。20日作業休止。
- 7月21・22日 西部遺構確認。SI1～3、SD1、SK7調査。
- 7月25～29日 SI2～4調査。SI1、SK1～7、SD1、Pit1平面計測。29日雨天のため作業休止。
- 8月1～3日 SI3・4、SK8・9、Pit2・3調査。SI2・3、SK8・9、Pit2・3平面計測。トレンチ1掘削・断面計測。
- 8月4日 工程調整のため作業休止。
- 8月5日 SI4、SK10、Pit4調査。基本土層テストピット掘削。
- 8月8・9日 SI4、SK10、Pit4平面計測。基本土層テストピット断面計測。空撮準備(清掃作業等)。
- 8月10日 空撮実施。一部遺構埋め戻し(安全対策)。調査器材整理。
- 8月11日 調査器材搬出。
- 8月12～16日 お盆期間のため作業休止。
- 8月17日 埋め戻し。安全柵撤去。テント解体・搬出。
- 8月18日 埋め戻し終了。仮設トイレ搬出。調査終了。



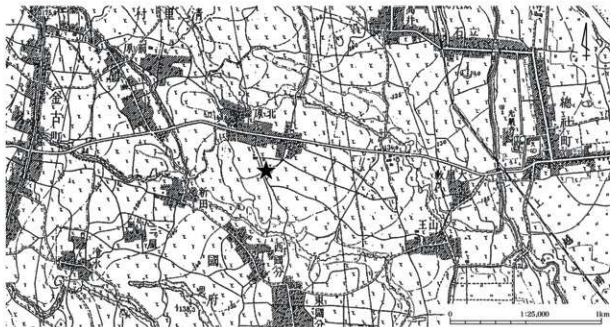
第2図 北原・萩林遺跡遺構配置図

第三章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

高崎市は総面積約459.41km²の群馬県の中核市で、群馬県の南西部をほぼ横断するかたちで位置している。西端は長野県北佐久郡軽井沢町、東端は埼玉県児玉郡上里町に接しており、概観して西端の鼻曲山を水源とする烏川により東西に分断された地勢を呈す。かかる烏川は南東方向へと流下しながら中流域で碓氷川、下流域で鍋川・井野川等の支流を集めて玉村町東端へと至り、ここで最終的に利根川へと合流する。市域の西側一帯は山地および丘陵地が大半を占め、相対して東側平野部の烏川右岸には洪積台地である前橋台地が広がっている。前橋台地の基盤は約2～2.4万年前の浅間山体崩壊を給源とする前橋泥流堆積物であり、これが榛名・浅間山等の火山噴出物に被覆され、現況地形の外殻を成している。この中で井野川～烏川間の地帯は特に「高崎台地」と呼ばれることもあり、前橋台地を数メートル以上の厚さで高崎泥流堆積物が覆って現況の地形を成しているが、その形成時期については未詳である。

本遺跡が所在する北原町は高崎市の北東端部、旧群馬町域に含まれ、前橋市との境界地の一つである。榛名山南東麓に形成された相馬ヶ原扇状地と前橋台地との移行地帯に属し、標高135～145m前後の南東面する緩傾斜地に位置する。地形の基盤を成す相馬ヶ原扇状地は、標高600m付近を扇頂とする砂礫主体の裾野扇状地で、扇端とされる標高110mの等高線上では8km程度の広がりをもつ。その形成は約1.4万年前の榛名山山体崩壊時の岩層なだれを発端に、As-YP降下(約1.3万～1.4万年前)までの比較的短期間で現形に至ったと考えられている。その後地形面には中小河川による放射谷が幾筋も刻まれるが、その浸食はいずれも扇端付近で弱まって幅広かつ浅い谷へと変化し、帯状の低台地が連続する地形を削出している。本遺跡もその一つ、南を牛池川・北を八幡川に挟まれた幅650～800m前後の台地先端付近に立地している。かつては桑や野菜を中心とした畑作地帯であったが、年々宅地化が進行し、さらに東側には前橋工業団地をはじめ商業地としての街並みが揃うなど、市街化傾向が一時的に加速してその余韻が今も尚残る地域といえる。



第3図 1929(昭和4)年の遺跡地周辺

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺では昭和50年代から、関越自動車道(新潟線)をはじめとする幹線道路新設や区画整理などの大規模事業が相次いでいる。伴う発掘調査も多々実施され、その成果は地域的な歴史像解明に繋がる有効な資料としての蓄積をみせている。惟駁ではあるが本遺跡周辺の歴史的環境について、これら既調査遺跡からの情報をふまえ、以下にまとめてみる。

旧石器時代

当該期の遺跡は周辺地では全く知られていない。前述したように相馬ヶ原扇状地は1万3千～1万4千年前に形成されたのであり、続く河川浸食による放射谷の形成、あるいはその流域の段丘化など、不安定な地形変遷が人々の生活の障りになっていたのであろう。

縄文時代

最も遡る段階では、早期の遺物が上野国分館寺・尼寺中間地域遺跡群(第4図-5・以降「中間地域遺跡群」と略記)、熊野谷遺跡(24)、稲荷塚道東遺跡(43)などで報告されている。しかしいずれも断片的な資料に留まり、併せて地域内での出土頻度なども鑑みれば人々の進退は消極的であるといえ、当該期の自然環境も生活上に不適な状況にあったことが窺える。

前期でも後半(諸磯期)に入ると、散発的に居住の痕跡が辿れるようになる。長久保大畑遺跡(13)や高井桃ノ木遺跡(15)、清里・長久保遺跡(16)、下東西清水遺跡(21)では包含層や遺構覆土内に混在して遺物が出土しており、近隣にその流出源となる集落等の存在を想定させる。実際に中間地域遺跡群で1軒、元総社蒼海遺跡群(47)で4軒の諸磯C期住居跡が検出されており、この段階でようやく生活域としての条件が揃いつつあったことを暗示している。

続く中期には、各所で集落の出現をみるようになる。特に後半期(加曾利E期)には一つの両期を迎えたようであり、中間地域遺跡群、清里・長久保遺跡、熊野谷遺跡、大屋敷遺跡(34)、産業道路東遺跡(41)、元総社蒼海遺跡群をはじめ10ヶ所以上もの集落遺跡や包蔵地が知られている。集落の発達は染谷川左岸域に顕著であり、当該期最大規模とされる中間地域遺跡群の集落もここに立地する。また、長久保大畑遺跡では多数の配石遺構や集石が群在して検出されており、やはり周辺に相当規模の集落を想定し得る。

後期は、中期と比べ衰退期ともいえる状況で、清里・長久保遺跡、鳥羽遺跡(6)、産業道路西遺跡(42)の各1軒の住居跡など、遺構の検出率が極端に減少する。なお、晩期の遺構は今のところ例をみない。

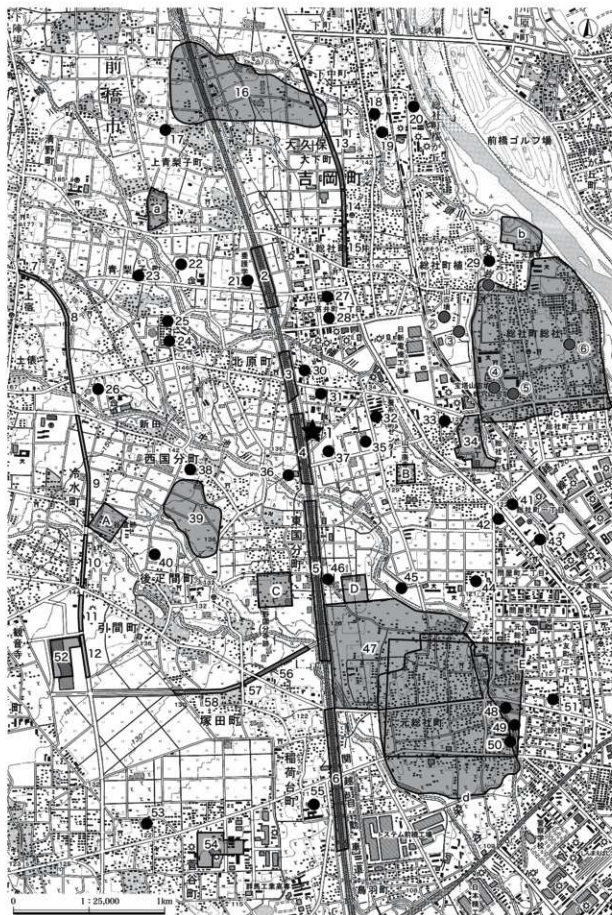
弥生時代

初頭に位置付けられる、西三社免遺跡(12)の沖式土器の破片資料が最古例である。前期に至っても北原遺跡(3)の須和田式土器など遺物の出土が若干例知られるのみであり、遺構の報告例は皆無である。

中期に入ると集落の形成が開始されるものの、概観して散居的な状況であり、後期以降もこの傾向は続く。しかしながら清里・庚申塚遺跡(17)で検出された中期後半(竜見町期)の環濠集落や、中間地域遺跡群の後期前半(樽期)の方形周溝墓の存在などが組織的な土地開発の萌芽を物語っており、さらに元総社寺田遺跡(50)では3軒の後期住居跡が末期以前のAs-C埋没水田跡に近接し、当時の生活基盤たる水田経営がこの時期に遡って始動した可能性を示唆している。

古墳時代

初頭～前期の集落は、中間地域遺跡群、鳥羽遺跡、西三社免遺跡、長久保大畑遺跡、青葉遺跡(28)、稲荷塚道東遺跡(43)、元総社西川遺跡(56)などが知られる。このうち中間地域遺跡群の集落は住居跡25軒・方形周溝墓1基とやや優位性をもつようだが、地域全体としては小集落が散在するのが普遍的であり、社会的にも未成熟な状況が垣間見える。



第4図 周辺道跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	文献
1	北原・森跡遺跡	本郷所蔵	
2	下室西遺跡	縄文前期土坑/弥生~平安集落/中世紀穴状遺構・井戸	群馬文 1987「下室西遺跡」
3	北原遺跡	古墳後期木田/奈良~平安集落/中世溝	群馬町教委 1986「北原遺跡」
4	四分塚遺跡	古墳終末期~平安集落	群馬文 1990「四分塚遺跡」
5	上野田分替寺・尼寺中四世紀遺跡群	縄文中期・弥生~古墳前期・後期~中世集落	群馬文 1986~92「上野田分替寺・尼寺中四世紀」(1)~(7)
6	烏沼遺跡	古墳中期/奈良前期/古墳中前期/中世紀	群馬文 1986-88-90-92「烏沼遺跡」
7	青梨子上原塚遺跡	奈良前期/穴状/中世紀/近世以降土坑/溝	群馬文 2003「青梨子上原塚遺跡・金古北十三町遺跡群」
8	金古北十三町遺跡	古墳 FA 下水田・品/奈良~平安集落/中~近世屋敷・道路	群馬文 1998「冷谷村東遺跡、西田分遺跡、金古北十三町遺跡」
9	冷谷村東、西田分新田遺跡	古墳後期・奈良~平安集落/FA下水田・品/B下水田	
10	諏訪西遺跡	古墳中期・奈良~平安集落/FA下品/中~近世土坑・溝	群馬町教委 1995「諏訪西遺跡」
11	小池遺跡	古墳後期~平安集落/FA下品	群馬町教委 1992「小池遺跡」
12	西三社免遺跡	古墳前期~平安集落	群馬町教委 1990「西三社免遺跡」
13	長久保大塚遺跡	縄文中期階段/古墳前期~平安集落/FA-B下水田/中世紀	群馬町教委 1990「長久保大塚遺跡」
14	久保原田入土遺跡	縄文中期前期/古墳品/奈良~平安集落/中世溝	群馬文 2000「長久保大塚遺跡、新田入土遺跡」
15	高井塚本1~3号遺跡	縄文~中世紀合葬/古墳後期~平安集落/中世品・土坑	大友町西浦部遺跡調査会 1999「高井塚/本遺跡」他
16	清里・長久保遺跡	縄文中期集落/古墳期(後期~終末期)/平安期穴状/墓	群馬文 1986「清里・長久保遺跡」
17	清里・中中塚遺跡	弥生~中前期集落/古墳期(終末期)/平安期穴状	群馬文 1982「清里・中中塚遺跡」
18	大下遺跡	縄文土坑群/奈良集落/B下遺跡遺構	古墳町教委 1993「大下遺跡」
19	西久保遺跡	平安集落	前橋市調査員 1993「西久保遺跡」
20	能社村丘遺跡	奈良~平安集落/中~近世品・溝	前橋市調査員 1985「能社村丘遺跡」
21	下室西水上遺跡	奈良~平安集落/中~近世屋敷・墓	群馬文 1998「下室西水上遺跡」
22	中島遺跡	奈良~平安集落	前橋市教委 1981「中島遺跡」
23	松ノ木遺跡	平安集落/近世土坑	前橋市教委 1981「清里南原遺跡群」
24	熊野谷遺跡	縄文中~後期集落/平安集落	前橋市調査員 1989「熊野谷遺跡」
25	熊野谷日・田遺跡	平安集落	前橋市調査員 1991「熊野谷日・田遺跡」
26	青梨子金古塚遺跡	FA上品/平安集落	県史第一本遺跡調査会 1995「青梨子金古塚遺跡」
27	榊木遺跡	奈良~平安集落/中~近世土坑	群馬町教委 1984「榊木遺跡」
28	養老遺跡	古墳前期穴状	前橋市教委 1988「養老遺跡」
29	石古遺跡	奈良~平安集落	前橋市調査員 1989「石古遺跡」
30	北原北下遺跡	平安期穴状	群馬町教委 1995「北原北下遺跡」
31	北原村西遺跡	平安期穴状/溝	群馬町教委 2004「北原村西遺跡、中島組合遺跡」
32	能社村古沢遺跡	平安集落	能社組合古沢遺跡調査会 1997「能社村古沢遺跡」
33	村東遺跡	奈良~平安集落/中世紀	前橋市調査員 1987「村東遺跡」
34	大塚東遺跡1~IV	縄文中期・古墳後期~平安集落/中世紀	前橋市調査員 1993~96「大塚東遺跡」1~IV
35	隈分地日遺跡	古墳終末期~奈良集落	前橋市教委 1991「隈分地日遺跡」
36	隈分地田遺跡	古墳終末期~平安集落	群馬町教委 1993「隈分地田遺跡」
37	隈分地IV遺跡	平安集落	
38	西田分六ツ溝遺跡	古墳後期品/奈良集落/近世土坑	群馬町教委 1996「西田分六ツ溝」
39	西田分遺跡群	古墳中期~平安集落/FA下品/中世紀	群馬町教委 1989「西田分1遺跡」他
40	後武間遺跡群	古墳中期~平安集落/平安小竪沼/中世田	群馬町教委 1986「後武間1遺跡」他
41	産業道路東遺跡	縄文中期穴状	
42	産業道路西遺跡	縄文後期穴状	前橋市 1971「熊谷市史」第1巻
43	熊谷塚東遺跡	古墳前期~平安集落/平安カマド村後部群	群馬文 2003「熊谷塚東遺跡」
44	能社村熊谷塚大道西遺跡	奈良~平安集落/中世品/高世溝	前橋市調査員 2002「能社村熊谷塚大道西遺跡」
45	元能社北川遺跡	古墳前期水路/FA下水田/FA最上品/B最上水田	群馬文 2007「元能社北川遺跡」
46	東田分兼助遺跡	平安集落	高崎市教委 2006「東田分兼助遺跡」
47	元能社兼助遺跡群	縄文前・中期・古墳後期~平安集落/中世紀・墓	前橋市調査員 2006~11「元能社兼助遺跡群」(1)~(34)
48	太友塚遺跡・田遺跡	古墳後期・平安集落/中世地下式土坑・井戸 1987	前橋市調査員 1987「太友塚田遺跡」
49	元能社神明遺跡1~XⅧ	古墳後期~平安集落/FA-B下水田/中世紀	前橋市教委 2002「元能社神明遺跡」1~XⅧ
50	元能社寺田遺跡1~Ⅲ	縄文~弥生合葬/心/FA下水田/中世紀/近世屋敷	群馬文 1993-94-96「元能社寺田遺跡」1~Ⅲ
51	熊谷遺跡	奈良~平安集落	山武考古学研究所 1988「熊谷遺跡」
52	榊高水窪日・榊高辻の内IV遺跡	古墳後期~平安集落・品/中世溝	高崎市教委 2008「榊高水窪日・榊高辻の内IV遺跡」
53	菅谷万石井戸遺跡	平安集落	高崎市教委 2007「菅谷万石井戸遺跡」
54	菅谷・村東遺跡	奈良~平安集落・道路状遺構/中世紀/道路状遺構	高崎市教委 2011「菅谷・村東遺跡」
55	榊高辻・北金尾遺跡	縄文前・中期土坑/C下品/奈良~平安集落	高崎市教委 2010「榊高辻・北金尾遺跡」
56	元能社内田・塚田中原遺跡	元能社内田・FA-B下品/中~近世集落	群馬文 2003「元能社内田・塚田中原遺跡」
57	塚田村東IV・塚田中原・引田色塚遺跡	奈良~平安集落/FA下-B最上品/中世紀/墓	群馬文 2005「塚田村東IV遺跡、塚田中原遺跡、引田色塚遺跡」
58	榊高辻久保・引田六石・塚田の南・引田色塚遺跡	古墳後期~平安集落/FA下-B最上品/中世紀遺構	群馬文 2007「引田六石遺跡、引田色塚遺跡、塚田中原遺跡」
①	榊岡山古墳	90m 前方後円墳?/角安能川石室/6C末	前橋市教委 1988「榊岡山古墳」
②	能社二子山古墳	約 90m 前方後円墳/石室2(角安能川・柳安丸石)/6C後	日本文化研究所 1937「日本文化研究所報告」4・他
③	愛宕山古墳	約 56m 方墳/角安能川石室・塚形石棺/7C前	前橋市調査員 1996「能社愛宕山古墳」
④	宝珠山古墳	約 60 m 方墳/碓石石室・塚形石棺/7C後	群馬県 1981「群馬県史」資料編3・他
⑤	蛇穴山古墳	約 43m 方墳/碓石石室/7C末	群馬町教委 1992「平成3年度市内遺跡発掘調査報告書」
⑥	遠見山古墳	約 70m 前方後円墳/彫六石?/5C後	群馬町教委 2005「北谷遺跡」
A	北谷遺跡	築鉄版/5C後~6C初	群馬町教委 1976「山王寺跡発掘調査報告書」他
B	山王寺跡	金堂基壇・講堂基壇・回廊遺構・塔心礎・礎石/7C後創建	群馬町教委 1989「山王寺跡発掘調査報告書」他
C	上野田分替寺跡	金堂基壇・講堂基壇・築石/8C中創建	群馬町教委 1970-71「上野田分替寺跡発掘調査報告書」他
D	上野田分替寺跡	金堂基壇・講堂基壇・中門基壇/8C中創建	群馬町教委 1968「上野田分替寺跡発掘調査報告書」他
E	上野田分替寺跡	古式官道/東~北辺区画	
a	青梨子遺跡	古式官道/16C?	
b	熊山遺跡	熊山大平遺失(熊山田屋敷)/堀/14C	山崎 1971「群馬県古城原址の研究」上巻
c	能社城跡	熊山平野遺失(熊山田屋敷)/堀・土坑/17C初	前橋市 1971「熊谷市史」第1巻
d	吾妻城跡	熊野遺失堀・土坑/堀/15C?	群馬町教委 1980「群馬県の中世紀」

※文献の略記号：群馬文＝財団法人群馬県歴史文化財調査事業誌「教委－教委委員会」調査誌＝群馬県文化財調査報告

中期～後期初頭の段階においても、下東西遺跡や諏訪西遺跡(10)、西国分遺跡群(39)、後穴間遺跡群(40)、稲荷塚東遺跡など、実際の調査例を見る限りでは集落の発達に大きな変化は認め難い。しかし一方で5世紀後葉に比定される北谷遺跡(A)の豪族居館、さらに並行して著名な総社古墳群中の初出前方後円墳である70m級の遠見山古墳(⑥)が成立しており、地域的伸長を遂げた相応の勢力基盤の定着、言わば盟主の台頭をこれらが物語っている。6世紀初頭のHr-FA災害による疲弊も少なからずあったはずだが、この地域統合への胎動は委縮することなく、むしろ6世紀後葉以降における集落拡大とその増大へと結実するようである。実例として当該期の新規集落遺跡は冷水村東・西国分新田遺跡(9)、小池遺跡(11)、大屋敷遺跡(34)など、ほか第1表に割愛した遺跡も含めると多数におよび、このような組織的ともいえる地域開発の進展が、当地域の势力的な隆盛を確固たるものにしたことは想像に難くない。その証左として総社古墳群の動向をみれば、6世紀後葉における90m級前方後円墳の総社二子山古墳(②)成立以降、終末期(7世紀代)の愛宕山古墳(③)、宝塔山古墳(④)、蛇穴山古墳(⑤)といった大型方墳の継起的な築造は本県唯一例であり、7世紀後葉には県内最古の伽藍寺院とされる山王廃寺(B)も創建されるなど、古墳時代が終息に向かう7世紀代には、次の律令制下における「上野国」の母体がここに形成されていたと認識できるのである。

奈良・平安時代

いわゆる「律令制」が施行され、総社古墳群勢力の広域統合を基盤として上野国府(E)が成立する。上野国府については核心部の判明には未だ至らずだが、元総社明神遺跡(49)などからその外縁を区切るとみられる堀割りの跡が発見されている。これらが仮に国府の境界を示すなら東限および北限が設定でき、8～9町(約860～980m)四方の兆域が復元可能となる。さらにこの国府外縁には従属集落も計画的に配置されることになり、現在の中核都市さながらの盛況を鑑みることができる。古墳時代からの継続的な集落もあれば新規開発とみられる集落もあり、後者の調査例では北原遺跡、金古北十三町遺跡(8)、総社桜ヶ丘遺跡(20)、下東西清水遺跡(21)、中島遺跡(22)、総社甲稲荷塚大道西遺跡(44)、堰越遺跡(51)、菅谷・村東遺跡(54)、稲荷台・北金尾遺跡(55)、元総社西川・塚田中原遺跡(56)、塚田村東Ⅳ・塚田中原・引間松葉遺跡(57)等枚挙にいとまがなく、周辺地の随所が相次いで集落化を果たしたと理解できる。加えて741(天平13)年には「国分寺建立の詔」が発令され、上野国府近辺にも上野国分僧寺(C)および国分尼寺(D)が創建される。これらと直接関連するの、中間地域遺跡群など仏教系の遺物を出土する集落も間々確認できる。そのほか鳥羽遺跡では、奈良時代の鍛冶工房や神社の可能性のある区画遺構なども検出されており、上野国府を取り巻く集落の中でもその特異性が注視されるところである。

このような情勢の中、生活基盤となる当地域の水稲耕作は、地形的な制約もあり中小河川開析の谷地を中心に展開された。北原遺跡、冷水村東・西国分新田遺跡、長久保大畑遺跡、元総社北川遺跡(45)、元総社明神遺跡、元総社寺田遺跡などではAs-C、さらにHr-FAやAs-Bなどに被覆された水田跡が検出されている。古墳時代前期、ともすれば弥生時代後期からの継続的な土地利用が考えられ、限定された湿地帯を合理的に開墾して利用する様子が各期に亘って見て取れる。

中世以降

室町時代に蒼海城(d)が築城され、永享元(1429)年の修築を経て上野守護代長尾氏の拠点となった。県内でも最古級の城郭に数えられ、縄張りには上野国府跡の大半を取り込むのだが、その実態は不明点が多い。元総社蒼海遺跡群や元総社寺田遺跡などで堀割りの一部が調査されている。同城は永禄10(1567)年の武田氏侵攻によって落城し、さらに慶長6(1601)年秋元氏が総社城(C)を築城・入封したことで廃城となった。また、周辺には環壕屋敷も散見され、鳥羽遺跡、金古北十三遺跡、長久保大畑遺跡、下東西清水遺跡、大屋敷遺跡などの調査例が知られる。こういった屋敷の造営を可とした、国人級の有力当主が多数情抗する地であったことが窺えるであろう。

第IV章 基本層序

調査地はつい最近まで工場敷地内となっており、その造成に伴うとみられる盛土が調査区内を厚く覆っていた。調査区内に多数掘り込まれた掘乱もこの時期のものと考えられ、遺構検出面上位に存在したはずの堆積層は殆どが失われている状況であった。よって基本層序の観察は、北西と南東の一部の壁面のみで実施した。観察に際してはいわゆるハードロームの下位まで試掘坑を掘削し、遺構検出面下の状況も併せて記録するようにつとめた。以下、その結果を記す。

第I層：調査区全体を覆う現代の造成土(盛土)である。建築廃材や砕石、砂礫などで形成される。

第II層：土地改良以前の耕作土とみられ、いわゆるAs-B混土の層相を呈す。3層に細別され、部分的にAs-Aとみられる大粒の軽石が含まれる。深耕のためか、調査区の西部ではIII層中にもこの層土が不規則に混じっている。

第III層：いわゆるAs-C混土である。色調はいずれも黒色系統であり、As-Cの含有量や締りなどから3層に細別される。この上面が今回の遺構検出面である。

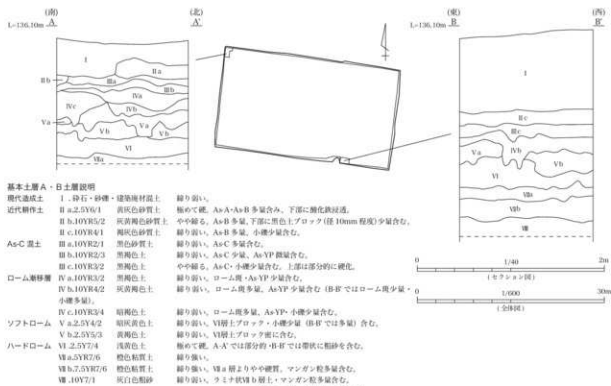
第IV層：ローム漸移層。少量ながらもAs-YPが含まれる。3層に細別される。いわゆる淡色黒ボク土に相当するものと考えられる。

第V層：ソフトローム層。2層に細別されるが、植物による影響だろうか、攪拌土状を呈している。

第VI層：ハードローム層。帯状、あるいは部分的に粗砂を含む。この粗砂はVII層に近似しており、再堆積の可能性はある。

第VII層：粘土質ローム層。層質から水成堆積と考えられる。2層に細別され、下層にはマンガン粒が多く含まれている。

第VIII層：粗砂層であるが、風化した凝灰岩層と考えられる。相馬ヶ原扇状地の直接的な成因となった、岩屑なだれに由来するものと思われる。



第5図 基本層序図

第V章 検出された遺構と遺物

今回の調査における遺構は、竪穴住居跡(SI)4軒、土坑(SK)10基、溝跡(SD)1条、ピット(Pit)4基である。一部の土坑・ピットには自然遺構とみられるものも混在するが、概ね竪穴住居跡を中心とする集落遺跡として理解できる。遺構密度は決して濃いものではなく、また住居跡同士の重複もない。さらにこれらの住居跡は出土遺物の特徴からそれぞれ近い時期の構築であると捉えられ、一部の土坑にも併行性を考え得るものがある。こういった遺構の有り方には、一定の期間に限定された土地利用の具体的な状況が表出されていると考えられるであろう。

(1) 竪穴住居跡(SI)

SI1 (第6・7図 第2・8表 PL2・7)

位置・残存 調査区北東隅部に検出された。大半が調査区外にあり、南西部のみの検出である。

形状・規模 各辺の検出部の状況から、方形基調であると推測される。検出された規模は東西2.45m程、南北3.50m程である。カマドの付設を東辺に想定すれば、その方位はN-65°-Eとなる。

覆土 床面上の堆積土は5層に大別され、このうち第1・3・4層がそれぞれ層相や堆積状況などから2層ずつに細別される。いずれも自然堆積とみられ、特にAs-Cの混入が目立って認められる。第1・2層は後述するSI2~4のいずれにも類似土が観察され、埋没の近時性を示している。

壁・壁周溝 壁は若干開き気味に立ち上がり、最大高は30cm程を測る。壁周溝は検出壁の全体に認められたが、西壁では40~50cm前後内側にもう1条が巡り、壁の拡張を示している。計測値は壁際のものが幅18~32cm、深さ3~8cm、内側のものが幅14~27cm、深さ2~8cmで、全体的に浅い傾向がある。

床面・掘り方 床面はほぼ平坦で、硬化は弱い。掘り方は全体的に浅く、貼床は最大で14cmの厚みをもつ部分もあるが、大体10cm未満の薄いものであった。

柱穴・貯蔵穴等 柱穴はP1~4が検出された。このうちP1が大型でしっかりとしており、主柱相当の材を埋設していたと考えられる。西壁を壊して掘り込まれており、重複遺構の可能性も考慮したが断面観察で切り合いは認められなかった。P2~4はいずれも掘り方で検出だが、本来は床面から掘り込まれていたことが調査区壁際のP4断面などから看取される。規模はともに小さく、補助柱穴のなまと思われる。柱痕跡はP1~4のいずれにおいても確認されなかった。なお、貯蔵穴は検出されなかった。

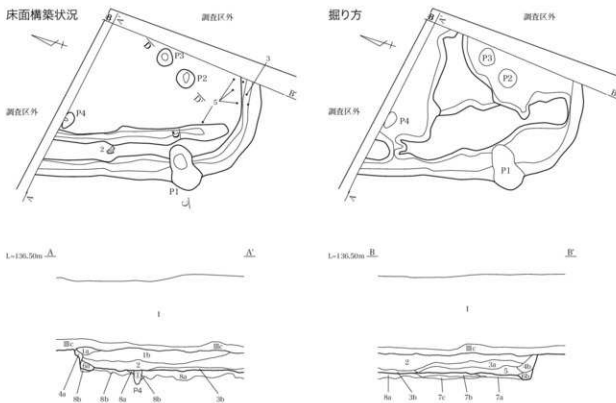
カマド 検出されなかった。SI2~4の状況から、調査区外の東壁に付設されていた可能性が高い。

遺物出土状態 覆土中の混入品も含め、全体として遺物量は少ない。密度は薄いが、南壁際の床面からやや浮いた状態でまとまる傾向が認められた。

図示遺物 6点を抽出した。1は須恵器の盤の破片である。体部は湾曲して立ち上がり、口唇部は扁平である。2は須恵器の鉢で、破片資料だが、いわゆる仏鉢(鉄鉢)に分類される特殊な器である。体部下半のタタキ痕が特徴的である。3の須恵器片は体部のケズリや肩部近くに2条の沈線を通らすことなどから、短胴で肩が張る形状の長頸壺破片である可能性が高い。4は土師器の坏。覆土中の小片だが、形態的にも本住居跡との共存性が濃く窺われる。5は土師器の甕。胴部の破片のみだが、薄手でしっかりとした焼成である。球胴甕の一部であろう。接合関係はないが同一個体とみられる破片はほかにも少量あり、口縁部破片も認められた。6は編み物石。1点のみの出土だが、調査区外で同種の埋蔵が想定される。

第2表 S11 柱穴観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	規模 cm			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	柱穴	不整楕円形	逆台形	74	35	58	なし	西壁端に食い込む。
P2	柱穴	隅丸方形	V字形	29	27	31	なし	
P3	柱穴	円形	逆台形	28	25	15	なし	
P4	柱穴	楕円形	U字形	28	(15)	22	なし	北端部調査区外。



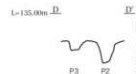
S11 土層説明

- | | | |
|-----|------------------------|--|
| 層土 | 1a. 10YR2/2 黒褐色土 | やや締る。AsC多量、ローム粒少量含む。 |
| | 1b. 10YR3/3 暗褐色土 | やや締る。AsC多量、ロームブロック（径10～20mm程度）少量含む。 |
| | 2. 10YR3/2 黒褐色土 | やや締る。AsC多量、ロームブロック（径5～10mm程度）微量含む。 |
| | 3a. 10YR2/3 黒褐色土 | 締り強い。AsC・ロームブロック（径10～20mm程度）少量、焼土粒微量含む。 |
| | 3b. 10YR2/2 黒褐色土 | 締り強い。AsC少量、ローム粒微量含む。 |
| | 4a. 10YR3/4 暗褐色土 | 締り強い。AsC（細粒）微量、ローム塊多量含む。 |
| | 4b. 10YR3/1 黒褐色土 | 締り強い。AsC・黒色土塊多量、ロームブロック（径20～50mm程度）少量含む。 |
| | 5. 7.5YR2/2 黒褐色土 | 締り強い。AsC・ロームブロック（径5～10mm程度）・焼土粒少量含む。 |
| 壁周溝 | 6a. 10YR3/3 暗褐色土 | 締り強い。AsC少量、ローム塊多量含む。 |
| | 6b. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 締り強い。AsC（細粒）微量、ロームブロック（径5mm程度）多量含む。 |
| 掘り方 | 7a. 2.5Y4/2 暗灰褐色土 | やや締る。ラミ状ローム層。下部にラミ状炭灰質灰化物多量含む。 |
| | 7b. 10YR4/2 灰青褐色土 | やや締る。AsC（細粒）少量、ロームブロック（径5～20mm程度）多量含む。 |
| | 7c. 2.5YR6/3 にぶい褐色粘層土 | 締り強い。灰白色粘土状焼結層。炭化物粒少量含む。 |
| | 8a. 10YR4/2 灰青褐色土 | やや締る。AsCを部分的に含み、ロームブロック密に含む。 |
| | 8b. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | やや締る。AsC微量、ロームブロック（径5～10mm程度）少量含む。 |
| | P4覆土①. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | やや締る。AsC少量、ローム塊多量含む。 |

P1



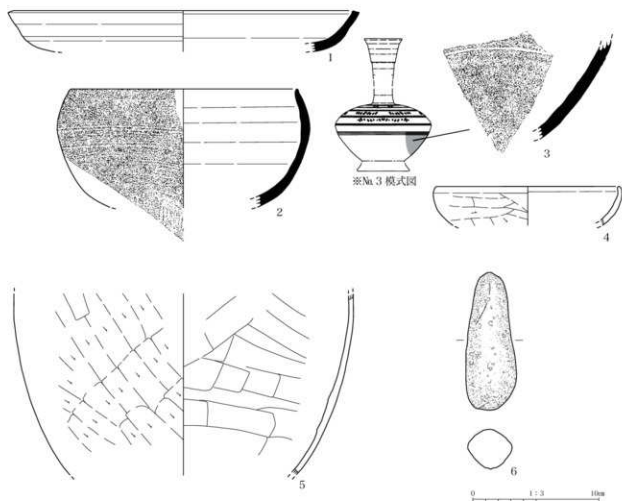
P2-3



S11-P1 土層説明

- | | |
|-------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色土 | やや締る。AsC多量、ローム粒微量含む。 |
| 2. 10YR3/2 黒褐色土 | 締り強い。AsC微量、ローム粒少量含む。 |
| 3a. 10YR3/3 暗褐色土 | 締り強い。AsC・ローム粒微量。 |
| 3b. 10YR4/2 灰青褐色土 | やや締る。ロームブロック（径5～20mm程度）多量、炭化物粒微量含む。 |

第6図 S11 遺構図



第7図 SI1 出土遺物実測図

SI2 (第8～11図 第3・8・9表 PL.2・3・7・8)

位置・残存 調査区南部にて検出された。東半部は攪乱のため上部が失われ、浅いものとなっている。

形状・規模 平面横長の長方形を呈し、東西4.3m程、南北3.3m程を測る。方位は、カマド方向でN-61°-Eを測る。

覆土 床面上の堆積土は5層に大別され、第3・4層がそれぞれ3層ずつ、第5層が2層に細別される。大半が自然堆積とみられるが、中層に堆積する第3層は人為的な埋土の可能性もある。SI1同様、全体的にAs-Cの混入が顕著である。

壁・壁周溝 壁は若干開き気味に立ち上がり、最大高55cm程を測る。壁周溝は西壁の南半部のみに伴い、幅19～24cm、深さ2～6cmを測る浅いものであった。

床面・掘り方 床面はほぼ平坦で、硬化は弱い。貼床は部分的で、大半がハードロームをそのまま床面に利用している。

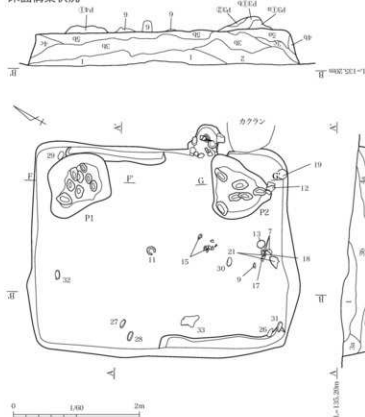
柱穴・貯蔵穴等 柱穴は一切検出されていない。貯蔵穴はカマドを挟み北にP1、南にP2が検出された。ただいずれも底面に耕具痕とみられる小凹凸を伴うことや、人為的に埋め戻されていることなどから、別の用途も推測される。床下からは同様の状況をもつ土坑P3・4も検出されており、特にP1・3・4の掘り込みがハードローム下の粘土質ロームに達している点が注目される。少なくともこの3基については、カマド材などの粘土材採掘坑である可能性も考えられる。

カマド 東壁に付設されている。中央からやや南に寄った位置にあり、燃焼部は壁外に張り出している。煙道部および焚口部は失われているが、残存奥行49cm、最大幅48cmを測る。壁の左右には凝灰岩の切石を立て、白色粘土を含む土材を突き固めて構築されている。北側の壁材は30cm程度厚みをもつが、この中からもう一つの切石材と割れ石が検出されていることから、壁の修復が考えられる。その際、カマドの幅を極端に縮小している。火床面はほぼ平坦で、奥壁の残存状況から煙道部へはある程度の段差を介して繋がるものと思われる。内部の被熱は弱く、焼土化も火床面のごく一部に留まる。

遺物出土状態 床面に散在、あるいは南壁際の一部に折り重なって出土した。床面遺物は中央から南寄りに拡散して分布する。また、カマド内にも人為的に投げ込まれた状態で遺物が集中していた。

図示遺物 27点を掲載した。7・8は須恵器の坏である。7は底部に回転ヘラケズリを施し、8は直線的な体部形状をもつ。9は須恵器の蓋で、端部のやや内側に小さな返りをもつ。10は須恵器の短頸壺で、小片ではあるが仏教系遺物とされる小型の葉蓋に似た形状が想定される。11・12は須恵器横断で、接合関係こそ認められなかったが、双方同一個体と考えられる。このうち11の口縁部資料は床面の中央に逆位で置かれた状態で出土しており、器台などへの転用が推測される。12の胴部も南壁際のP2壁で床面に貼り付くように出土し、ほかに同一個体とみられる破片が1点しか存在しないことなどから、これらは破砕した器を転用目的で本住居内に持ち込んだものと考えられる。13～21は土師器の坏。口縁部が短い13～19には大小規格差があるが、焼成や胎土混入物に共通性が認められるものが多い。また、20は模倣坏の系統に置かれるものである。21は平底で、体部の内面には突った金属でつけられたと思われる線刻がある。22～24は土師器の甕。同一個体とは断定できないが、全体的に薄手の作りである。25以降は石器である。ただ、25のスクレイパーは縄文時代のものである可能性が残り、混入遺物とみておきたい。26～32は編み物石で、33が台石である。台石の表裏面は平滑になっているが、明瞭な擦痕や敲打痕は観察されなかった。

床面構築状況



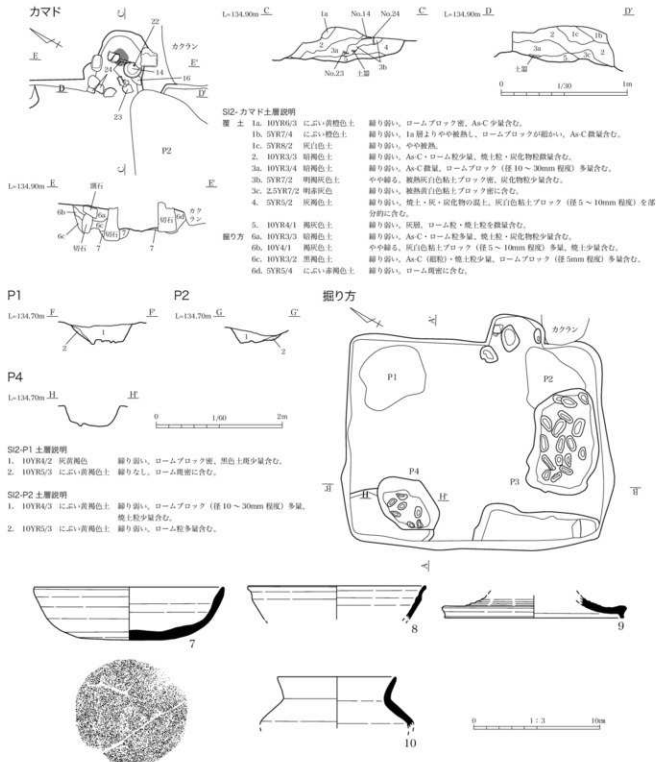
SI2土層説明

- 層土 1. 10YR3/3 暗褐色土 細り合い、AsC多量、ロームブロック (径10～20mm程度)・黒色土塊少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 細り合い、AsC多量、ロームブロック (径5～10mm程度) 少量含む。
- 3a. 10YR3/1 黒褐色土 細り合い、AsC・ローム粒多量、焼土粒少量含む。
- 3b. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 細り合い、AsC・ロームブロック (径10～50mm程度) 多量、黒色土塊少量含む。
- 3c. 10YR4/2 灰黄褐色土 やや締る、AsC・ローム粒・黒色土粒少量含む。
- 4a. 10YR3/2 暗褐色土 細り合い、AsC・ロームおよび黒色土ブロック (径10～30mm程度) 多量含む。
- 4b. 10YR4/4 褐色土 やや締る、AsC・黒色土粒少量、ローム粒少量含む。
- 4c. 10YR2/3 黒褐色土 細り合い、AsC少量、ローム・黒色土ブロック (径5～10mm程度) 少量含む。
- 5a. 10YR3/1 黒褐色土 細り合い、AsC・ローム粒・焼土土塊多量含む。
- 5b. 10YR3/2 黒褐色土 細り合い、AsC多量、ラミナ状ローム・黒色土少量含む。
- 細り方 6. 10YR2/2 黒褐色土 細り合い、ロームブロック多、AsC少量含む。
- P3層土 ① a. 10YR3/3 にぶい黄褐色土 細り合い、ローム粒多、土粒に風化炭化物含む。
- ① b. 2.5Y5/4 黄褐色土 やや締る、ロームブロック多、炭化物粒少量含む。
- ②. 10YR4/2 灰黄褐色土 細り合い、ロームブロック (径5～10mm程度)・炭化物粒多量含む。
- P4層土 ①. 2.5Y5/3 黄褐色土 やや締る、ロームブロック (径10～40mm程度) が大半を占め、黒色土塊少量含む。

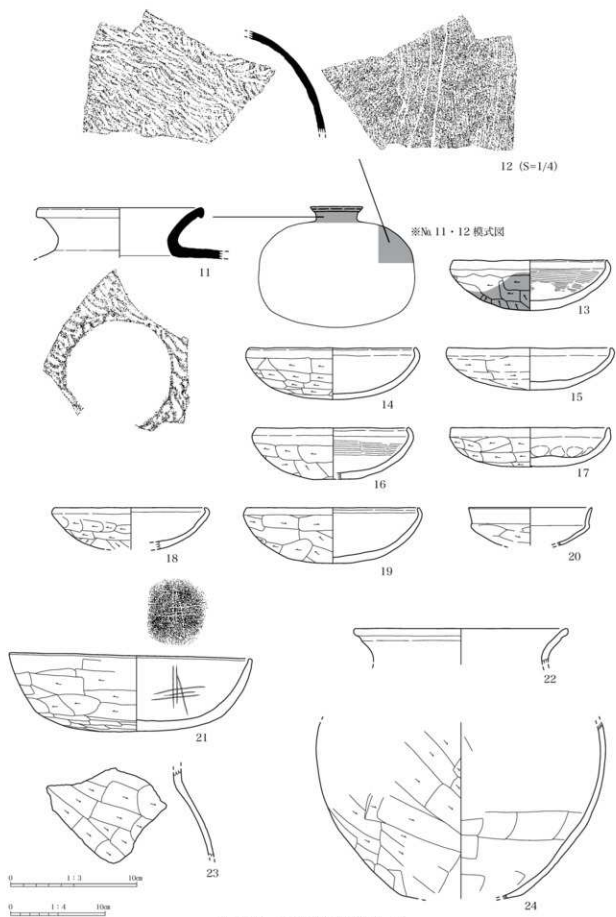
第8図 SI2遺構図-1

第3表 SI2 土坑観察表

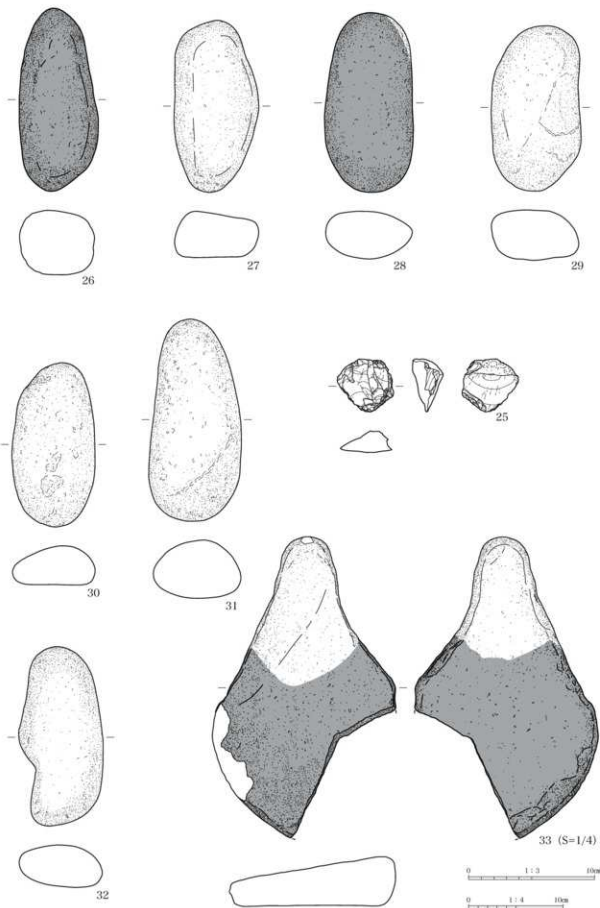
名称	分類	平面形状	断面形状	規格 cm 垂 () は残存値		出土遺物	備考
				長軸	短軸		
P1	貯蔵穴?	不整形方形	逆台形	94	85	29	なし
P2	貯蔵穴	不整形	逆台形	107	78	24	なし
P3	床下土坑	不整形長方形	逆台形	166	102	38	なし
P4	床下土坑	不整形楕円形	桶状	111	78	29	なし



第9図 SI2 遺構図-2・出土遺物実測図-1



第10図 S12出土遺物実測図-2



第 11 图 SI2 出土遺物実測図- 3

SI3 (第12～14図 第4・9表 PL.3・8)

位置・残存 調査区中央部にて検出された。北壁は擾乱のため上部を失うが、全体的に残存状態は良い。
 形状・規模 平面縦長の長方形で、規模は東西4.2m程、南北3.2m程を測る。カマド方位はN-69°-E。
 覆土 床面上の堆積土は7層に大別され、第3・7層が2層、第6層が3層に細別される。本住居跡ではむしろ人為的埋土が大半を占めると考えられ、ロームブロック等の含有率が高いほか、大粒のブロックが目立っている。また、As-Cの量も多い。

壁・壁周溝 壁の立ち上がりは東西壁では開き気味だが、南北壁では垂直に近く、最大高50cm程を測る。壁周溝はほぼ全周するが、西壁では90cm前後内側に巡り、ここから西壁に向かうようにして分岐するもう1条の溝が認められた。この点から本住居跡はもともと東西3.1m程の方形であったと推測され、西壁の拡張をもって現況の形状になったものと考えられる。これらの壁周溝の規模は前者で幅20～33cm、深さ4～8cm、後者で幅19～40cm、深さ3～4cmを測る。後者の溝の掘り込みは、かなり雑である。

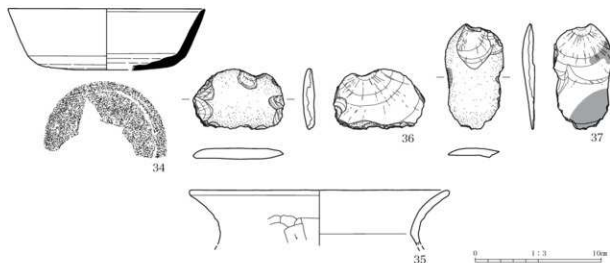
床面・掘り方 床面はほぼ平坦だが、顕著な硬化面はない。貼床はごく一部に認められたのみで、ハードローム直床に近い状況である。

柱穴・貯蔵穴等 柱穴は認められない。貯蔵穴はカマドの南にP1が検出された。また、掘り方調査の段階で北西部の床下よりP2が検出されている。

カマド 東壁の中央から若干南に寄った位置にあり、燃焼部は壁外に張り出す。焚口部は失われているが、煙道部は完存する。燃焼部は残存奥行58cm、最大幅65cmを測る。奥壁寄りには天井材も残るが、地山を掘り残してその材としている。袖石等、石材の検出は認められなかった。煙道部は長59cm、幅27cm程であり、階段状に掘り込まれている。火床面はほぼ平坦で、煙道部との間には高さ30cm程の奥壁を介している。内部の被熱は弱く、焼土化は部分的であった。

遺物出土状態 覆土遺物も少なく、床面遺物も僅かである。カマド内とその前方に、直接伴うとみられる遺物が若干出土した。

図示遺物 4点を図示した。34は須恵器の坏で、35とともに本住居の年代を示す稀少な指標遺物である。底部には回転ヘラケズリが施されている。35の土師器壺は口縁部の屈曲が極端で、ここに最大径が求められる可能性がある。同一個体とみられる破片は若干認められたが、全体の器形復元には至らなかった。36・37の石器、すなわちスクレイパーと削器は混入遺物の可能性がある。

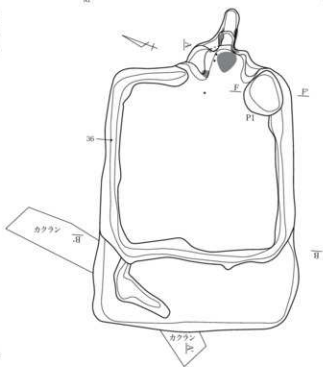
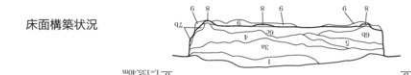


第12図 SI3出土遺物実測図

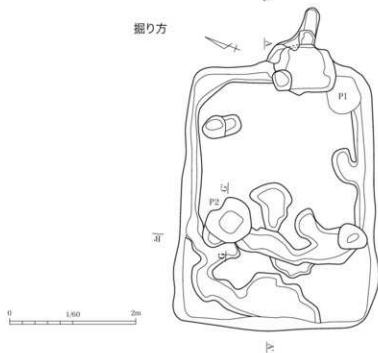
第4表 SI3土坑観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	掘削 cm 辺 () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	貯蔵穴	円形	進台形	64	61	11	なし	
P2	床下土坑	不整形	桶状	70	60	22	なし	人為的に埋土。

床面構築状況



掘り方



SI3土層説明

- 遺土 1. 10YR3/3 暗褐色土 細り強い, As・C 多量, ロームブロック (径5~30mm 程度) 少量含む。
 2. 5YR3/2 暗褐色土 やや細る, As・C・ロームブロック (径5~10mm 程度) 多量含む。
 3a. 10YR3/4 暗褐色土 細り強い, As・C・ロームブロック (径5~30mm 程度) 多量含む, 特に住居中央付近では黒色土ブロック (径5~30mm 程度) とともにロームブロックが散在。
 3b. 10YR3/4 暗褐色土 細り強い, As・C 多量, ロームブロック (径5~10mm 程度) 少量含む。
 4. 7.5YR3/2 黒褐色土 細り強い, As・C 多量, ロームブロック (径5~30mm 程度) 少量含む。
 5. 10YR4/3 に近い黄褐色土 細り強い, As・C 少量, ロームブロック (径5~20mm 程度) 多量含む。
 6a. 7.5YR3/3 暗褐色土 細り強い, As・C・ロームブロック (径 10mm 程度)・炭灰大の炭化物少量含む。
 6b. 10YR3/2 黒褐色土 細り強い, As・C・ロームブロック (径5~10mm 程度) 多量, 炭化物粉少量含む。
 6c. 10YR3/3 暗褐色土 細り強い, As・C・炭灰大の炭化物少量, ロームブロック (径5~10mm 程度) 多量含む。
 7a. 10YR5/4 に近い黄褐色土 細り強い, ローム塊面に含む。
 7b. 10YR4/4 褐色土 細り強い, ロームと黒褐色土がブロック状に混じる。
 壁面層 8. 10YR3/3 暗褐色土 細り強い, ローム少量含む。
 掘り方 9. 10YR2/3 黒褐色土 やや細る, ロームブロック (径 10~30mm 程度) 重に含む。

P1

L=135.40m E



SI3-P1土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 細り強い, As・C・ラミナ状ローム・黒色土少量, 炭土粒微量含む。

P2

L=134.80m E

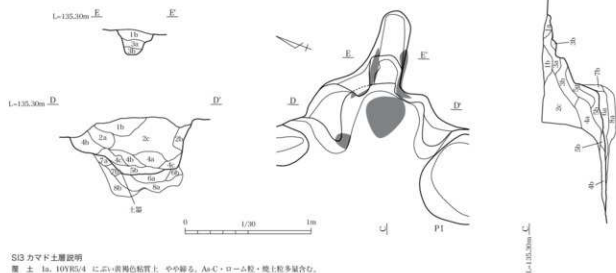


SI3-P2土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 やや細る, ロームブロック (径 10~60mm 程度)・黒色土塊多量含む。
 2. 7.5YR6/4 褐色粘質土 やや細る, 黒褐色土ブロック (径 5~10mm 程度) 多量含む。

第 13 図 SI3 遺構図 - 1

カマド



SI3 カマド土層説明

層土	説明	特徴
1a, 10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	やや締る, Aa-C・ローム粒・焼土粒多量含む。
1b, 7.5YR4/2	灰褐色土	やや締る, Aa-C 少量, ローム粒・焼土粒少量含む。
2a, 5YR5/3	にぶい赤褐色土	やや締る, Aa-C 少量, 一部やや硬熟。
2b, 7.5YR5/4	にぶい褐色土	やや締る, Aa-C・ローム質・焼土質多量含む。
2c, 10YR4/3	にぶい黄褐色土	締り弱い, Aa-C 多量, ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。
2d, 5YR5/2	灰褐色土	やや締る, Aa-C (細粒) 少量, 焼土ブロック (径 5~10mm 程度) 多量含む。
2e, 10YR4/1	褐色土	締り弱い, Aa-C・ローム粒・焼土粒少量含む。
2f, 7.5YR4/3	褐色粘質土	締り強い, Aa-C(細粒)・焼土ブロック (径 5~30mm 程度) 少量, ロームブロック (径 10~20mm 程度) 密に含む。
2g, 10YR4/2	灰黄褐色土	締り弱い, Aa-C 少量含む, C-C ではローム粒・焼土粒・炭化物粒を集中的に含む。
2h, 7.5YR5/3	にぶい褐色土	締り弱い, 焼土ブロックと灰の混じり, Aa-C (細粒) 微量含む。
3a, 5YR5/2	灰褐色土	締り強い, 焼土質 (一部ブロック状) 密に, 下部に灰を集中的に含む。
3b, 2.5Y5/1	黄灰色土	締り弱い, 灰質, 焼土ブロック (径 10mm 程度) 多量, 炭化物粒少量含む。
掘り方 4a, N5/0	灰色土	締り弱い, 灰質, 焼土粒少量含む。
4b, 10YR3/2	黒褐色土	締り弱い, ローム粒・焼土粒微量含む。
4c, 10YR3/3	灰黄褐色土	締り弱い, ローム塊質に含む。
4d, 10YR4/1	灰黄褐色土	締り弱い, ローム粒・焼土粒少量含む。
4e, 10YR3/3	暗褐色土	締り強い, ロームブロック (径 5~10mm 程度) 少量, 焼土ブロック (径 10mm 程度) 微量含む。
4f, 10YR3/4	暗褐色土	締り弱い, ロームブロック (径 10~20mm 程度) 少量, 焼土粒微量含む。

第14図 SI3 遺構図-2

SI4 (第15~17図 第5・9表 PL.4・9)

位置・残存 調査区西端部にて検出された。残存は悪く、床面および壁は擾乱による損傷が著しい。西部が調査区外となるほかは、全体の2/3程が検出された。

形状・規模 平面方形で、規模は東西3.9m、南北3.95m程を測る。カマド方位は N-59°-E。

覆土 床面上の堆積土は6層に大別され、第3~5層がそれぞれ2層に細別される。いずれも自然堆積とみられるが、最上層の第1層は攪拌土状を呈す。その理由については、直上に基本層序第II層が堆積することから後世の耕作などの影響が考えられる。また、第5層はa・b層ともにP4内に流入しており、本住居跡の埋没時にはP4に蓋などがされず、開口していたことが窺える。

壁・壁周溝 壁は上部がやや開き、特に東壁から北壁にかけての開きが顕著である、最大高は60cm程を測る。壁周溝は東壁を除きコ字状に巡るものと思われ、幅9~16cm、深さ2~8cmを測る。南壁の西寄りて一部途切れる。

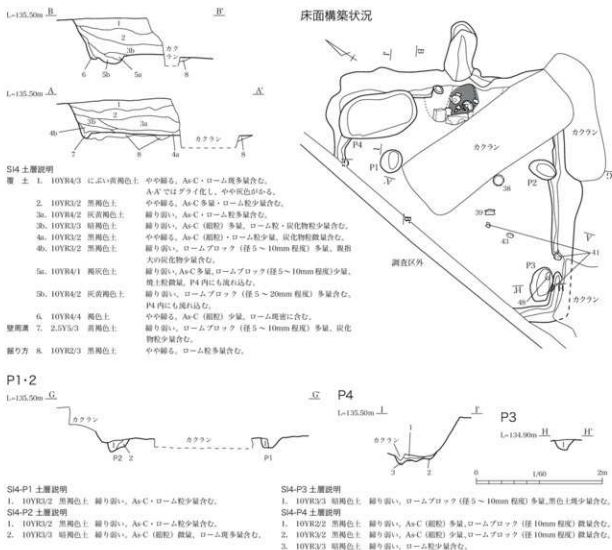
床面・掘り方 床面は擾乱などの影響を受け、部分的に貼床が残存するのみであったが、中央付近には僅かだが硬化面が認められた。掘り方は浅く、薄い貼床が全体に施されていたものと推測される。

柱穴・貯蔵穴等 柱穴はP1~3が認められた。L字形に並んでおり、恐らく調査区外にもう1基が存在したのと考えられる。これらの配置は偏在性をもち、南西寄りの傾向がある。主柱穴とみられるが、いずれも小型で浅い。貯蔵穴はカマドの北にP4が検出されている。

カマド 東壁の中央から僅かに南に寄る。燃焼部は壁内にあり、煙道部も完存する。袖壁は擾乱の影響などから基部しか残存しておらず、その基部も調査中に崩落し、かろうじて断ち割り調査が実施できたのみであった。焚口には凝灰岩切石の袖石と懸架材が残り、ここから復元される燃焼部は奥行60cm、最大幅45cm程である。袖壁は基本層序第三層に近似したAs-C混じりの黒色土を主体に構築されているが、突き固めは弱くかなり脆い。火床面は焚口方向へとやや傾斜し、その中央には凝灰岩切石による支脚が1石ある。この支脚は粘土を接着剤のように用いて、火床面上に直接固定されている。奥壁は低めであり、火床面と煙道部との比高差は13cm程度である。煙道部は長94cm、幅42cm程を測り、先端部の煙出しは階段状となっている。内部の被熱は弱く、焼土化は火床面のみに認められる。

遺物出土状態 床面遺物は南部に集中し、カマド内にも多量の土器が人為的に廃棄されていた。

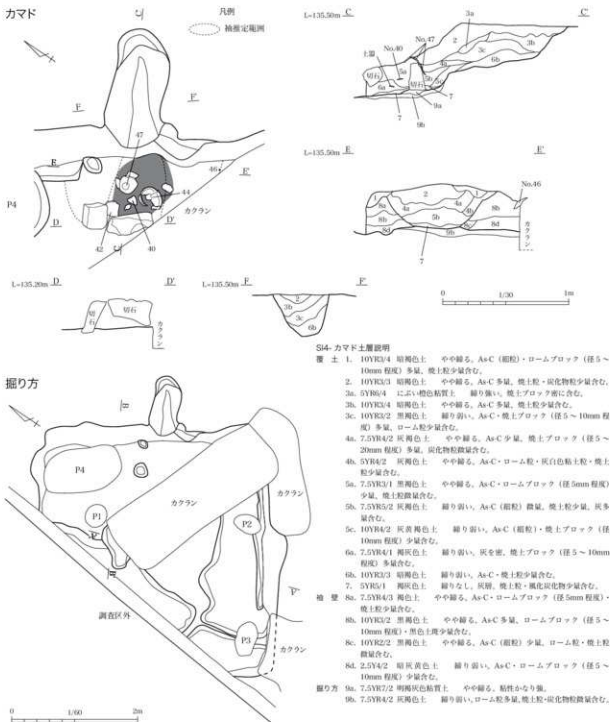
図示遺物 11点を抽出した。38は須恵器の高坏で脚部を欠くが、その剥落面には摩滅痕があり、この状態での使用が考えられる。39は須恵器の甕。口縁部のみで覆土上層から出土していることから、混入遺物の可能性もある。40～44は土師器の坏。このうち44は大型品で器形の歪みも顕著である。45～47は土師器の甕。それぞれ同一個体の可能性もあるが、確証は得られなかった。このうち46はカマドの南袖壁内に大半が埋没した状態で、47は逆位で支脚に被さって出土しており、いずれもカマド構築材への転用品であろう。48の編み物石は1点のみの出土であり、調査区外部分にもいくつか埋藏されている可能性がある。



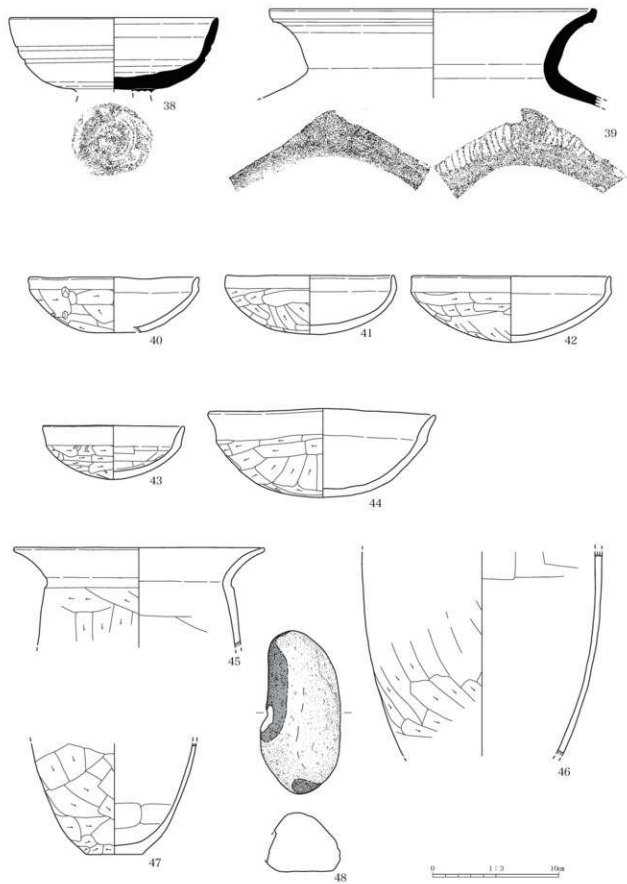
第15図 S14 遺構図-1

第5表 SI4 柱穴・土坑観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	規模 cm 単 () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	柱穴	円形	逆台形	37	33	16	なし	人為的に埋土。底面に餅貝類。
P2	柱穴	楕円形	逆台形	44	30	17	なし	人為的に埋土。底面に餅貝類。
P3	柱穴	楕円形	逆台形	54	32	16	なし	人為的に埋土。底面に餅貝類。
P4	貯蔵穴	楕円長方形	逆台形	125	70	15	なし	人為的に埋土。底面に餅貝類。



第16図 SI4遺構図-2



第 17 图 SI4 出土遺物実測図

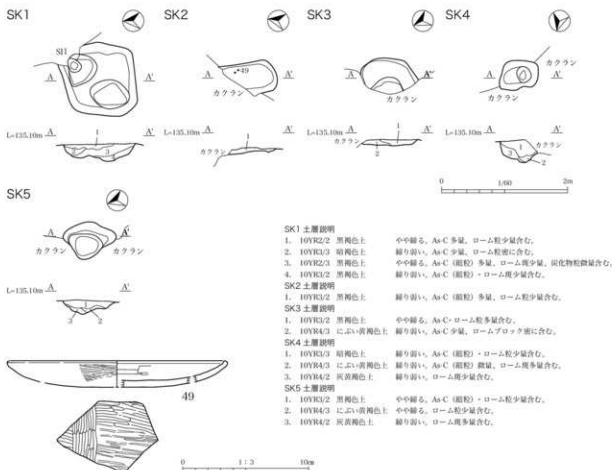
(2) 土坑(SK) (第18・19図 第6・9表 PL.5・6・9)

規則的な配置はみられず、調査区に点在して検出された。時期は新旧さまざまであると思われ、SK6・7・10のように覆土の特徴が住居跡との併行性を示すものもあれば、SK1のように住居跡に壊されるものもある。遺物が出土したのはSK2のみで、土器器の破片が2点出土している。同一個体と思われ、図示した49がそれである。口縁部と底部の破片を図上で復元した。坏とみられるが、かなり浅い器形であり、内外面全体にミガキを施す丁寧な仕上げであることが窺われる。

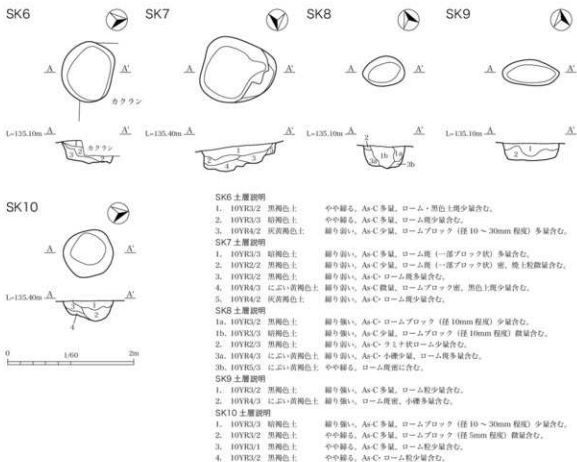
これらの土坑の大半は雑に掘り込まれ、底面の凹凸が著しい。一部には木の根など、非人為的に形成された窪みも混在する可能性がある。各土坑の詳細については、第6表を参照されたい。

第6表 SK 観察表

名称	位置	平面形状	断面形状	規模 cm 並 () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
SK1	北東部	隅丸方形	椀状	115	113	27	なし	SI1に切られる。底面不規則に窪む。
SK2	北部	隅丸長方形	逆台形?	(90)	52	8	土師器杯片2点	上部扁平、覆乱に切られる。残存2/3。
SK3	北部	円形?	逆台形?	(92)	(56)	9	なし	覆乱に切られる。残存1/2。底面にビツト。
SK4	東部	不整形方形	逆台形	59	47	33	なし	覆乱に切られる。残存4/5。底面にビツト。
SK5	東部	不整形円形?	不定形	(84)	(61)	20	なし	覆乱に切られる。残存1/2。自然形成か。
SK6	南部	円形	箱形	96	81	35	なし	覆乱に切られる。残存3/4。覆土SIに逆乱。
SK7	北西部	楕円形	箱形	114	98	36	なし	覆乱に切られる。西壁に段差。覆土SIに逆乱。
SK8	東部	楕円形	箱形	66	47	34	なし	
SK9	東部	長楕円形	箱形	91	41	26	なし	
SK10	南西部	円形	U字形	78	72	31	なし	覆土SIに逆乱。



第18図 SK1～5 遺構図・SK2 出土遺物実測図

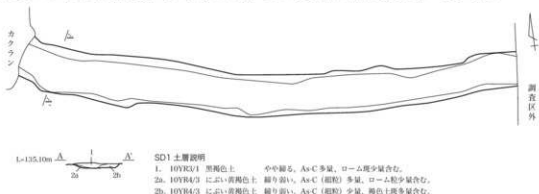


第 19 図 SK6～10 遺構図

(3) 溝跡(SD)

SD1 (第20図 PL.6)

調査区の北東部、S11の南側に検出された。東端は調査区外、西端は掘乱内にあつたものと思われる。走行方位はN-89°-106°-Eと、僅かに湾曲しながら東西に延びる。規模は検出長7.9m程、幅51～82cmを測り、深さは最深部でも10cm程度とかなり浅い。流水の痕跡は認められず、広めで安定した下幅をもつことなどから、底面の硬化は顕著でないものの通路の類であると考えられる。遺物は覆土中から縄文土器の小破片が1点出土したのみであり、図示に至らず割愛した。本溝跡の時期は、検出面が基本層序第Ⅲ層上面であることや、覆土におけるAs-C混入状況などから、古墳時代以降であると思われる。しかしS11～4の住居跡とはいずれも方向性に食い違いが認められ、これらとの同時性は考えにくいであろう。



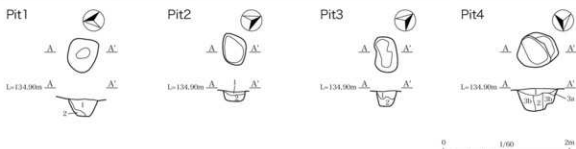
第 20 図 SD1 遺構図

(4) ピット(Pit) (第21図 第7表 PL.6)

検出数は4基と少なく、整った形状であるものはP1・4のみである。P2・3は底面形状が歪で、根穴など自然のものである可能性も残る。P4は土層断面に柱痕跡が確認されたが、掘立柱建物跡の一部としてもその主要部は調査区外に位置すると考えられる。なお、これらのピットからの遺物は殆どなく、P4から僅かに須恵器製の小片が出土したのみであった。各ピットの詳細については、第7表を参照されたい。

第7表 Pit観察表

名称	位置	平面形状	断面形状	規模 cm ※()は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	北部	楕円方形	逆台形	(53)	(46)	(27)	なし	土層傾平。
P2	北東部	楕円形	箱形	54	48	15	なし	形状歪、自然形成か。
P3	北東部	不整楕円形	逆台形	60	32	24	なし	形状歪、自然形成か。
P4	南部	楕円形	逆台形	64	55	34	須恵器製片3点	土層断面に柱痕跡(径14cm)。西壁に段差。



Pit1 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 緑り弱い、As-C (細粒) 微塵、ローム粒少量含む。
2. 10YR3/3 黒褐色土 緑り弱い、ロームブロック密に含む。

Pit2 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 緑り弱い、As-C 微塵、ローム粒少量含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 や中緑る、ロームブロック (径10～20mm程度) 多量含む。

Pit3 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 緑り弱い、As-C (細粒)・ローム粒少量含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 や中緑る、ロームブロック (径5～10mm程度) 少量含む。

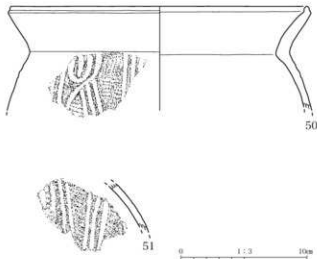
Pit4 土層説明

1. 7.5YR4/2 灰褐色土 や中緑る、As-C 多量、ローム粒微塵含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 緑り弱い、As-C 少量含む、※柱痕跡
- 3a. 10YR3/1 黒褐色土 や中緑る、As-C (細粒)・ローム粒微塵含む。
- 3b. 10YR2/3 黒褐色土 緑り弱い、小粒・ロームブロック (径5mm程度) 少量含む。

第21図 Pit1～4遺構図

(5) 遺構外出土遺物(第22図 PL.9)

調査区の随所に穿たれた乱瓦や、南西部に認められた近代以降の耕作痕などからは、少量ではあるが遺物が出土している。その殆どが住居跡と併行する時期の所産と考えられるが、縄文土器の破片が2点出土しており、これを図示した。50・51ともに同一個体の深鉢片と思われる。全体の器形は瓢形が推測され、平行沈線による幾何学文やLR充填縄文などの文様が施されている。これらの特徴から後期前葉、堀之内1式に比定される。



第22図 遺構外出土遺物実測図

第8表 北原・萩林遺跡出土遺物観察表-1

出土 No	種類 名称	出土 位置	計測値 (cm・g)		胎土	特徴・調整・文様等
			色調 (外側・内側) / 地色	形状		
1	須恵系 甕	S11 甕土	口：(27.8) 高：(7.3) 底：— 最大径：— 口縁～体部破片 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	砂粒・白色粒	ロクロ整形。 外：体部下位傾ヘラケズリ。
2	須恵系 鉢	S11 甕土	口：(17.9) 高：(9.4) 底：— 最大径：(20.0) 口縁～体部破片 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	砂粒	ロクロ整形。 外：体部カメ。底部付近に平行タタキ。 いわゆる「仏鉢」。
3	須恵系 長頸壺	S11 甕土	口：— 高：(7.8) 底：— 最大径：— 体部破片 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	粗砂粒・石英 チャート	外：上位に2条の平行沈線。中～下位ヘラケズリ。
4	土師系 杯	S11 甕土	口：(14.5) 高：(3.1) 底：— 最大径：(15.0) 口縁～体部破片 外：褐色 内：鈍褐色/不良・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・雲母	外：1:縁部コナデ。体部ヘラケズリ。 内：コナデ。 外面やや磨滅。
5	土師系 壺	S11 甕土	口：— 高：(14.4) 底：— 最大径：— 胴部破片 底面：褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・内四石	胴部球状を呈す。 外：ヘラケズリ。 内：ヘラケズリ。
6	石部 觸物石	S11 甕土	長：10.9 幅：4.0 厚：3.2 重：206.36 完形	—	—	石材：粗粒輝石安山岩
7	須恵系 杯	S12 床面	口：15.0 高：4.2 底：8.0 最大径：— 2/3 外：灰白色 内：灰白色/不良・還元焼	—	砂粒・白色粒 褐色粒・雲母	ロクロ整形。 外：底部傾ヘラケズリ。
8	須恵系 杯	S12 床面	口：(13.9) 高：(2.7) 底：— 最大径：— 口縁～体部破片 外：灰色 内：灰白色/良好・還元焼	—	砂粒・白色粒	ロクロ整形。
9	須恵系 蓋	S12 床面	口：(14.0) 高：(1.8) 底：— 最大径：(14.6) 口縁破片 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	粗砂粒・白色粒 石英	ロクロ整形。
10	須恵系 短頸壺	S12 甕土	口：(9.2) 高：(4.1) 底：— 最大径：(12.6) 口縁～胴部破片 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	砂粒・白色粒	外：ナデ。 内：ナデ。
11	須恵系 瓶	S12 床面	口：13.0 高：(4.0) 底：— 最大径：— 口縁～胴部 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	粗砂粒・白色粒 褐色粒	外：1:縁部コナデ。胴部上端ナデ。 内：1:縁部コナデ。胴部上高背状の当て具状。 口縁部内面に輪彫残存。No.12と同一個体小。 外：粘子タタキ後、浅い沈線を部分的に施す。 内：背背状の当て具部。 No.11と同一個体小。
12	須恵系 瓶	S12 床面	口：— 高：(10.7) 底：— 最大径：— 胴部破片 外：灰色 内：灰色/良好・還元焼	—	粗砂粒・白色粒	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。
13	土師系 杯	S12 床面	口：12.3 高：4.0 底：— 最大径：12.8 1/2 外：鈍褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。
14	土師系 杯	S12 カマド	口：13.1 高：4.1 底：— 最大径：13.8 3/4 外：褐色 内：褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・内四石 雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。
15	土師系 杯	S12 床面	口：12.8 高：3.4 底：— 最大径：13.1 1/2 外：完形 外：褐色 内：褐色/不良・酸化焼	—	粗砂粒・白色粒 チャート・雲母 内四石	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。 外面磨滅。
16	土師系 杯	S12 カマド	口：12.0 高：4.1 底：— 最大径：12.8 1/2 外：鈍褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。 口縁～底部内面に黒色の付着物
17	土師系 杯	S12 床面	口：(12.5) 高：3.1 底：— 最大径：(12.8) 1/2 外：褐色 内：褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。 体～底部尾方に断面E痕線。
18	土師系 杯	S12 甕土	口：(12.0) 高：(3.4) 底：— 最大径：(12.5) 1/3 外：褐色 内：褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。
19	土師系 杯	S12 床面	口：13.8 高：4.4 底：— 最大径：14.2 完形 外：鈍褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。 体部外面の一部に付着物。
20	土師系 杯	S12 甕土	口：(9.6) 高：(3.0) 底：— 最大径：— 口縁～体部破片 外：褐色 内：褐色/不良・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・雲母	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。 外面磨滅。
21	土師系 杯	S12 甕土	口：19.2 高：6.1 底：— 最大径：— 1/2 外：褐色 内：褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 内四石・褐色粒 チャート	外：1:縁部コナデ。体～底部ヘラケズリ。 内：1:縁部コナデ。体～底部ナデ。 体部内面に線痕。
22	土師系 壺	S12 カマド内	口：(16.8) 高：(2.9) 底：— 最大径：— 口縁破片 外：鈍褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・褐色粒 褐色粒・雲母	外：コナデ。 内：コナデ。
23	土師系 壺	S12 カマド内	口：— 高：(6.9) 底：— 最大径：— 口～胴部破片 外：褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・褐色粒 内四石・白色粒 雲母	外：頸部コナデ。胴部ヘラケズリ。 内：ヘラケズリ。
24	土師系 壺	S12 カマド内	口：— 高：(13.0) 底：— 最大径：— 口～胴部 外：鈍褐色 内：鈍褐色/良好・酸化焼	—	砂粒・白色粒 雲母・チャート 石英	胴部球状を呈す。 外：ヘラケズリ。 内：ヘラケズリ。
25	石部 アトコ	S12 甕土	長：4.2 幅：14.4 厚：2.4 重：38.99 完形	—	—	石材：黒色頁岩 縄文時代小。
26	石部 觸物石	S12 床面	長：14.5 幅：6.3 厚：5.2 重：774.79 完形	—	—	石材：粗粒輝石安山岩 全面に付着物。

第9表 北原・萩林遺跡出土遺物観察表-2

出土 No.	種類 器種	出土 位置	計測値 (cm・g)		胎土	特徴・調整・文様等
			形状	色調(外側・内側) / 地色		
27	石器 扁物石	S12 床面	長:13.6 幅:6.8 厚:3.7 重:558.89 完形			石材:胆埴野石(安山岩)
28	石器 扁物石	S12 床面	長:14.3 幅:7.1 厚:3.8 重:660.08 完形			石材:胆埴野石(安山岩) 表面に煤付着。
29	石器 扁物石	S12 床面	長:13.1 幅:7.1 厚:4.4 重:663.78 完形			石材:変玄武岩 表面一部摩滅。
30	石器 扁物石	S12 床面	長:13.0 幅:6.6 厚:3.7 重:428.81 完形			石材:高結晶閃石岩
31	石器 扁物石	S12 床面	長:16.0 幅:7.4 厚:4.6 重:778.35 完形			石材:ひん岩
32	石器 扁物石	S12 床面	長:14.3 幅:6.7 厚:3.5 重:547.22 完形			石材:閃綠岩
33	石器 台石	S12 床面	長:31.9 幅:19.5 厚:5.3 重:3136.12 3/4			石材:胆埴野石(安山岩) 表・裏面に煤付着。
34	土師器 甕	S13 甕土	H:15.4 高:4.9 底:9.2 最大径:一 1.5 外:灰褐色 内:灰褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒	ロウク型形。 外:底部回転ヘラケズリ。	
35	土師器 甕	S13 甕土	H:20.4 高:14.4 底:一 最大径:一 1 口縁~胴部破片 外:黄褐色 内:灰褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 角四石・雲母	外:ココナデ。下端部ヘラケズリ。 内:ココナデ。下端部ヘラケナデ。	
36	石器 3片(ハ)	S13 甕土	長:4.8 幅:7.3 厚:0.9 重:39.86 完形			石材:紫色頁岩 縄文時代か。
37	石器 燗甕	S13 甕土	長:8.4 幅:4.7 厚:0.9 重:32.03 完形			石材:紫色頁岩 表面および裏面の一部に煤付着。 縄文時代か。
38	土師器 高杯	S14 床面	H:16.4 高:(5.9) 底:一 最大径:一 杯身部 外:黄褐色 内:灰褐色 / 良好・還元腐 蝕	粗砂粒・白色粒 石英	ロウク型形。 体部中に2本の平行沈線。底部に脚白部割着痕。	
39	土師器 甕	S14 甕土	H:25.2 高:(7.8) 底:一 最大径:一 1 口縁~胴部破片 外:灰褐色 内:灰褐色 / 良好・還元腐 蝕	粗砂粒・白色粒 褐色粒・雲母	外:ココナデ。 内:口縁部ココナデ。胴部上端に当て具痕跡。	
40	土師器 杯	S14 カマド内	H:13.4 高:4.3 底:一 最大径:一 1 口縁部 外:褐色 内:褐色 / 不良・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 角四石・雲母	外:口縁部ココナデ。体へ底部ヘラケズリ。 内:口縁部ココナデ。底面ナデ。 外面やや摩滅。	
41	土師器 杯	S14 床面	H:13.2 高:4.7 底:一 最大径:13.6 口縁部 外:褐色 内:褐色 / 不良・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 雲母	外:口縁部ココナデ。体へ底部ヘラケズリ。 内:口縁部ココナデ。底面ナデ。 外面・内面ともに摩滅。	
42	土師器 杯	S14 カマド内	H:15.7 高:5.3 底:一 最大径:一 2/3 外:褐色 内:鈍褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・雲母	外:口縁部ココナデ。体へ底部ヘラケズリ。 内:口縁部ココナデ。体へ底部ナデ。	
43	土師器 杯	S14 床面	H:11.1 高:4.3 底:一 最大径:一 1/2 外:鈍褐色 内:鈍褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・角四石 雲母	外:口縁部ココナデ。体へ底部ヘラケズリ。 内:口縁部ココナデ。体へ底部ナデ。	
44	土師器 杯	S14 カマド内	H:17.7 高:7.1 底:一 最大径:一 完形 外:褐色 内:明赤褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 チャート・雲母	外:口縁部ココナデ。体へ底部ヘラケズリ。 内:口縁部ココナデ。体へ底部ナデ。	
45	土師器 甕	S14 甕土	H:(19.6) 高:(7.9) 底:一 最大径:一 1 口縁~胴部破片 外:褐色 内:褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 褐色粒・角四石	外:口縁部ココナデ。胴部ヘラケズリ。 内:口縁部ココナデ。胴部ヘラケナデ。	
46	土師器 甕	S14 カマド内	H:一 高:(16.2) 底:一 最大径:一 胴部破片 外:褐色 内:灰褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 角四石・雲母	外:ヘラケズリ。 内:ヘラケナデ。	
47	土師器 甕	S14 カマド内	H:一 高:(8.8) 底:4.5 最大径:一 胴部破片 外:灰褐色 内:明赤褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 角四石・雲母	外:ヘラケズリ。 内:ヘラケナデ。	
48	石器 扁物石	S14 床面	長:13.0 幅:6.3 厚:4.8 重:500.67 一部欠損			石材:胆埴野石(安山岩) 表面の一部に煤付着。
49	土師器 杯	SK2 底面	H:(17.0) 高:(2.1) 底:一 最大径:一 口縁部破片・底部破片(図上復元) 外:明赤褐色 内:明赤褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・雲母	外:ヘラミギキ。 内:ヘラケナデ。	
50	縄文土器 深鉢	遺構外 (祝丸内)	H:(23.5) 高:(8.3) 底:一 最大径:一 口縁~胴部破片 外:黄褐色 内:鈍褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・褐色粒 雲母・石英	口縁部「く」の字状に外反し、口唇部は直立して出る。 文様:口縁部無文。胴部3条1単位の沈線区画にLR縄文文柄。 No.51と同一個体か。	
51	縄文土器 深鉢	遺構外 (祝丸内)	H:一 高:(9.9) 底:一 最大径:一 胴部破片 外:黄褐色 内:鈍褐色 / 良好・酸化腐 蝕	粗砂粒・白色粒 雲母	文様:3条1単位の区画内にLR縄文文柄。押圧のある隆帯による縦沈区画。 No.50と同一個体か。	

第VI章 まとめ

第1節 住居跡出土土器について

今回の調査では4軒の住居跡が検出されている。出土遺物は土器・編み物石・台石で、金属製品や石製品などは一切認められなかった。出土状況では床面上に散在するか、カマド内や敷際に集中する傾向が強く、覆土中の一括品も概して少ない。また、SI2・4では完形品、あるいはこれに準じる個体が目立つものの、SI3では断片的な資料が少量散見されたのみであり、遺物の遺棄・廃棄のあり方も多様であったと推測される。

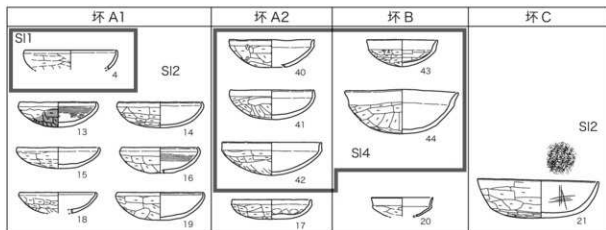
さて、本節ではこれら住居跡の出土土器をまず集成し、併せてその様相を整理してみたい。

(1) 土師器の様相

器種は坏・甕が認められた。甕については部分的な残片のみで、器形全体が揃うものは皆無である。また、SI4ではカマド構築材への転用品とみられるものが主体であるが破片ばかりで、いずれもカマド掛け残しの状況は看取できない。むしろ意図的な破壊行為を示すものとして捉えられるであろう。一方坏類は、SI2・4の例をみると甕とは対照的であり、カマド内へ集積されたか、あるいはそのまま放置されたような状況で出土している。こういった相違には恐らく当時の「甕」「坏」に対する何らかの価値観が表出されていると考えられる。

甕は前述の通り資料が限定されるが、長胴甕・球胴甕の2者の混在を認めた。ともに胴部は薄手で、厚さは最厚でも4mm程度である。整形は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデで、甕口はいずれも短い。長胴甕のうちSI4のNo.45～47（第17図）は、別個体の可能性が残るものの、それぞれの特徴から口縁部に最大径をもち、肩部が僅かに張る形状であったことが窺われる。

坏は丸底坏がほとんどで、1点だけ平底坏がある（SI2—No.21）。さらに丸底坏はいわゆる模倣坏とそれ以外のものに大別されるが、典型的な模倣坏は客体的であることから、模倣坏を「坏B」、その他を「坏A」とし、そして平底坏を「坏C」としておく。さらに坏Aは、口縁部が強く「く」字状に内傾する「A1」、直立傾向にある「A2」に細別した。なお、坏A2は模倣坏からの派生とも考えられるが、器形への志向が坏Bとは明確に分離でき、むしろ坏A1に準じることから、ここでは模倣坏の範疇から外しておきたい。

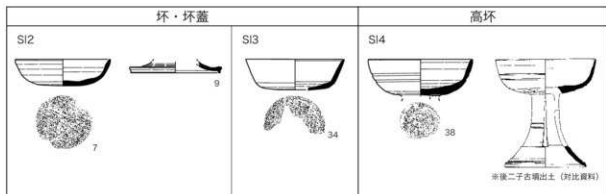


第23図 土師器坏集成図

(2) 須恵器の様相

坏・蓋・高坏・盤・鉢・甕・長頸壺・短頸壺・横瓶と様々な器種が認められたが、器形での分類が可能なものはSI2・3の坏各1点(No.7・34)と、SI4の高坏(No.38)のみであった。そのほかは破片での出土であったが、概観して日常什器以外の器種が目立ち、これらはその比率の高さから集落内のいずこかで使用されていた可能性が十分に考えられる。特にSI1-No.2の鉢(第7図)やSI2-No.10の短頸壺(第9図)などは仏器的な性格が与えられ、本遺跡の集落に対し特徴的な器種と位置付けることができる。

ここで坏と高坏に注目してみたい。坏はともに底部が回転ヘラケズリで整形され、体部から口縁部にかけては開いて立ち上がる。その立ち上がりはNo.7が湾曲気味なのに対し、No.34は直線的である。口縁部には返りはなく、いわゆる蓋环形態が逆転した後の所産であり、実際SI2からは蓋No.9も出土している。高坏は無蓋高坏とされるものであり、脚部全体を欠損しているが、その脱落面には摩擦が認められることから坏部だけで使用されていたことが窺われる。特徴としては「腕」状の器形と、体部中位に巡らされた2条の沈線が挙げられ、管見では類似例として前橋市後二子古墳の墓道出土資料、高崎市田端遺跡の寺東地区35号住居跡出土資料、太田市金山丘陵竈跡群中の八幡竈跡群における遺構外出土資料などがあるが、細部形状や法量などをみると後二子古墳例が類似しており、同型式の器種であった可能性が考えられる。



第24図 須恵器坏・坏蓋・高坏集成図

(3) 小結

これらの土器様相から比定される各住居跡の時期であるが、まずSI2とSI4から出土した土師器の坏群に着目してみると、SI4では坏A2および坏Bのみで構成されるのに対しSI2では全類型が揃い、かつ坏A1が主体となっていることが解る。さらに両住居跡の坏A2・坏Bをそれぞれ比較すれば、SI2の方が小型化、さらに底部の扁平化という傾向が表れており、これらが後出的であることが容易に看取されるであろう。なお、SI4の坏A2のうちNo.41はNo.40・42にみられる口縁部の微妙な外反はなく、体部との境にある外縁も曖昧であるなど、むしろ坏A1に近い特徴を備えた個体であるといえる。しかしながら坏A1はいずれも口縁部が短小で、内傾する屈曲も容易に視認できるほど極端なものとなっていることから、No.41は坏A2が坏A1へと移行する途中段階の形態と考えられる^(註2)。

次にSI2とSI3の須恵器坏を取り上げてみる。器高・器厚や体部形状に若干の相違はあるが、これらは胎土や焼成など明らかに生産地を違えるものであり、地域性も無視できない。実際にそれぞれの底部径に対する口縁部径の比率をみるとSI2-No.7で1.9倍、SI3-No.34で1.7倍と、さほど大差ない数値が導き出される。また全体の成形はともに渦巻状の粘土紐巻き上げで、底部整形も回転ヘラケズリである。こういった共通点は、むしろ両者の併行性を示していると思われる。

さて、SI4からSI2への先後関係、そしてSI2とSI3の同時性を試案したが、そこに与えられる実年代はどうか。先学の見解を参考にし、現状での検討を試みたい。⁽⁴³⁾

まずSI4の土器様相は、坏A2が模倣坏からの派生品である可能性があり、さらにその中に坏A1への過渡的な個体が混在すること、さらに坏Bが典型的な模倣坏の形態を残しながらも細部では外稜の「ダレ」や、口縁部の外反傾向が強く認められる点などから、7世紀後葉の年代が考えられる。これに後出するSI2については、坏Cの存在に画期的な様相の変化が捉えられなくもないが、坏A2および坏Bの混在がなおも客体的に残存することから、大幅な時期差は想定し難いであろう。よって7世紀末葉～8世紀初頭に比定するのが妥当と思われる。⁽⁴⁴⁾SI3も少量の資料ながらも須恵器坏の形態がSI2との同時性を示唆し、併行する年代を与え得る。ちなみに、掲載対象外とした覆土一括の土師器坏片は2点存在するが、いずれも坏A1で、形態的にもSI2の一群と類似するものであった。

最後にSI1の年代だが、坏A1に分類されるNo.4の形態はSI2のかか一群との共通性が指摘されるものの、小片のため今一つ決定的ではない。しかし5点認められた覆土一括の土師器坏はNo.4とほぼ同形品に限られ、共伴する他の土器形態からもSI4よりは新しく位置付けられる。雑駁ではあるが、今のところSI2と併行する時期を考えておきたい。

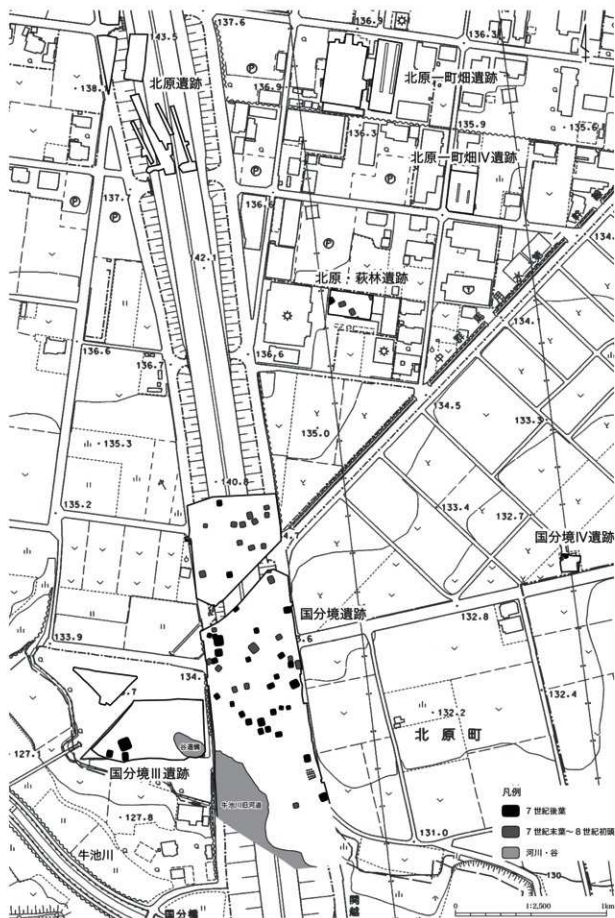
ところでSI4の高坏No.38は6世紀後葉の所産とみられるものであり、伴出住居とは1世紀近い空白が指摘される。その要因についてはこれが伝世品なのか、それとも偶然見つけた埋藏物なのか、憶測すらできないが、脚部欠損の状態での使用は「坏部」に対し何らかの嗜好があったことを暗示し、特殊な性格の器物として当時扱われていたことを彷彿させる。この点については、次節にて再度触れてみたい。

第2節 北原・萩林遺跡の集落について

7世紀後葉～8世紀初頭に比定される4軒の住居跡は、集落の一部であることは即断できるものの、調査範囲の制約からその全体像がいかようなものかは把握できない。そこで、広面積での調査が実施された近隣の国分境遺跡および国分境Ⅲ遺跡の状況から比較してみることにする。⁽⁴⁵⁾両遺跡は本遺跡の南西200m前後に位置し、国分境遺跡は1981～1984（昭和56～59）年に関越自動車道新潟線の建設に伴い、面積約15,000㎡が調査された。国分境Ⅲ遺跡は国分境遺跡の西側に接し、1991（平成3）年に毎日新聞社北関東コア建設に伴って面積約3,400㎡が調査されている。これらは牛池川右岸に形成された集落遺跡であり、7世紀後葉から造営が開始され、11世紀代まで存続することが確認されている。

これら2遺跡を合計すると、7世紀後葉～8世紀初頭の竪穴住居跡は56軒が数えられる。その分布は概ね数軒が一つの小群を構成、もしくは単独で点在するものであり、密集傾向にはない。さらに個々の小群は、一辺5mを超える大型住居跡を中核とする場合と、中型以下同等規模の住居跡だけで構成されるという2つの形態が存在し、配置的には前者の外縁を後者が取り巻くような状況である。また、7世紀末葉～8世紀初頭になると住居跡の分布はやや北側への偏在が窺われる。⁽⁴⁶⁾

北原・萩林遺跡の当該期集落も、これと同様の分布傾向を示すものであったと思われる。しかし国府境地区の集落が11世紀代まで存続するのに対し、当遺跡内では集落の継続的な状況を認め得ない。各住居跡の覆土一括遺物も少量で、これと大幅に時期を遡る混入品はごくわずかであった。さらに西側隣接地の関越自動車道用地内においても遺構検出の報告はなく、少なくとも今回検出された住居跡が構成したとみられる小群の近辺では、比較的短期間での居住放棄が想定される。加えて北西約200m前後に位置する北原遺跡では8世紀後葉から集落形成が開始され、⁽⁴⁷⁾さらにその北側の下東西遺跡でも8世紀前葉には集落が断続するなど、⁽⁴⁸⁾居住放棄後の人々が近隣地にて新たな集落を形成した痕跡は現状では認められない。⁽⁴⁹⁾



第25図 周辺の7世紀後半～8世紀初頭の住居跡

また、今回の調査でもう一つ注目したいのが須恵器「仏鉢」、「小型短頸壺」など、仏教系遺物の出土である。これらは当道跡の集落に、仏教文化の影響が何らかのかたちで波及していたことを物語る資料である。ちなみに仏鉢は本県では40例近くの出土が知られ、^(註10)分布も県内ほぼ全域におよぶものだが、管見では8世紀から9世紀の所産が主体である。SI1の仏鉢はこれらの中でも比較的早く位置付けられると思われ、体部下半にタキ痕を残すのも他の資料には認められない特徴である。また、周辺遺跡では下東西遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、鳥羽遺跡の3遺跡11例の出土を数えるが、このうち同時期に比定されるのは上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡の1例(A区199号住居跡)の資料のみであった。少なくとも当該期においては、その稀少性が指摘できるであろう。

このような仏教文化の影響を別の視点に置き換え、SI4の高坏を再度観察してみると、脚部欠損の状態が「佐波理鏡」(銅鏡)と良く似ているのが指摘される。もちろんこれだけの結論付けは避けるが、7世紀中葉以降は器形に金属器指向の影響を受けたとみられる土器の増加が指摘されており、仮にこのような背景の中で過去の「遺物」を仏器になぞらえ、重宝していたとすれば興味深い。現状ではその実証に至る術はないが、あ

周辺遺跡「仏鉢」

北原・萩林遺跡

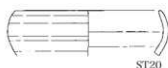


SI1

下東西遺跡



ST10



ST20

鳥羽遺跡

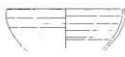


K区 173号住居

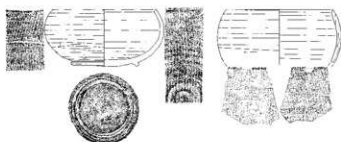
上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡



B区 73号住居



B区 91号住居

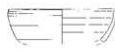


A区 199号住居

B区土坑群



C区 9号溝



B区 遺構外



B区 遺構外



I区 遺構外

SI4 高坏・佐波理鏡

北原・萩林遺跡



SI4

山王廃寺



寺域南方



寺域東側東門付近

第26図 周辺遺跡の仏鉢と佐波理鏡

くまで可能性の一つとして掲げておくことにする。

仏教文化の影響が窺える北原・萩林遺跡の集落については、南東約700mに位置する山王廃寺との関わりが無視できない。山王廃寺は本県最古の伽藍寺院とされ、その創建については7世紀第3四半期に遡る可能性が指摘されている^(註12)。今回検出されたSI1～4はこれと時期的に並行し、さらに位置的な関係など、山王廃寺との密接な関わりを示唆する点が多い。恐らくは国府境遺跡をはじめとする集落とともに、直接寺院の創建、さらには運営に携わるような人々が居住する集落であったと考えられる。

なお、当遺跡から山王廃寺に至る間では国分境Ⅱ遺跡、同IV遺跡の調査が行われているが、いずれも市道拡幅や鉄塔工事といった「線」あるいは「点」状の範囲における実施である^(註13)。また、一部の調査などから少なくとも集落の広がりが西側50m・北側100m前後の範囲内で終息することが想定されるが、未獲得の情報は山積みであるといえる。山王廃寺至近の状況も含み、こういった寺院外縁集落の諸相が、今後の調査で解明される日を待つこととした。

註)

1. 後二子古墳出土資料については文献21、田端遺跡出土資料については文献7、八幡堂跡群出土資料については文献29をそれぞれ参照した。
2. 実際には榎岡正信氏は、文献16の中で同様の見解を述べている。ただし、氏は坏A2を標識坏からの自然な器形変化から成立するとは考え難いとしており、假に標識坏の系譜を引いているとしても器形に対する意識の転換を両者の間に想定している。
3. 編年については文献2および文献16のほか、文献4・6・8・10・13・28の各遺跡内での分析結果を参考にした。当遺跡の土器群はそれぞれ文献に従えば、下記の通りの区分に類似する個体が含まれるものである。なお、区分の表示は各報告書に倣った。
文献2：第1～Ⅲ段階(7世紀第3四半期～8世紀第1四半期) 文献4：第1～Ⅲ段階(7世紀第2四半期～8世紀第1四半期)
文献6：第8～10段階(～8世紀第1四半期) 文献8：Ⅲ～Ⅳ期(7世紀後半～8世紀前半)
文献10：第Ⅱ～Ⅲ段階(7世紀後半～8世紀前半) 文献13：～第1段階(7世紀代～7世紀末葉)
文献16：Ⅱ～Ⅲ段階(7世紀後半～8世紀前半) 文献28：3～4期(7世紀後半～8世紀第1四半期)
なお、各文献の年代観にはこのように微妙な相違があるため、筆者が独自に再整理した年代を本書に提示している。
4. SI2のNo.20は残存1/5程度の破片資料である。しかしSI2の覆土遺物はいずれも床面近くの層から出土しており、さらに接合関係はないものの同一個体とみられる破片も若干含まれていたことから、直接伴伴する遺物として扱った。
5. 文献12および文献22参照。
6. この数は各報告書の記録を再整理し、新たに抽出したものである。その年代観は註3の作業で導き出された結果に基づいている。
7. 各遺跡で当該期に比定される一辺5m超の大型住居跡は下記の通りである。※()内は長軸×短軸m
国分境遺跡：A区2号住居跡(5.3×5.3)、B区15号住居跡(5.3×5.2)・21号住居跡(5.65×不明)・46号住居跡(6.2×5.4m)、C区29号住居跡(6.7×6.65)の計5軒。国分境Ⅲ遺跡：H-6(7.8×7.7)の1軒。これをみると、H-6が明顯に大規模であることがわかる。
8. 文献1。8世紀後葉の住居跡は6軒が検出されたにすぎない。
9. 文献4。7世紀代に関しては北原・萩林遺跡の住居跡と併行する部分もあるが、それ以降は8世紀第3四半期に至るまでの空白期がある。
10. 文献27を参照したが、これはあくまで1999(平成11)年の調査時の数であり、それ以外に筆者が独自に数えたものも含まれる。しかし県内全例の認識に至るものではなく、概算的なものでしかないことを予め断っておきたい。
11. 文献25。特に須磨器に関しては7世紀中葉以降、金属器に器形をなぞらえた器種が増えることが指摘されているが、その成因については直接の模倣でなくある一定の隔たりを有することが指摘されている。
12. 文献26の編年観による。
13. 文献15および23。特に文献15では開発予定地25,800㎡に対し、調査対象となったのはわずか20㎡に過ぎない。この点について、後世の耕作による厩平の進行が遺構の消失に繋がったものと報告書中で示唆されている。
14. 北原村東遺跡(平成7年度分)、北原村東遺跡(平成15年度分)、北原一町畑遺跡、北原一町畑IV遺跡の調査例などの照合による。堅住住居跡は当遺跡の北東約300mに位置する北原村東遺跡(平成15年度分)で1軒が検出されているのみであり、時期も8世紀前半に比定されている。

主要参考文献(発行年順)

1. 群馬町教育委員会 『北原遺跡』, 1986 (昭和61)年
2. 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」群馬県史編さん委員会『群馬県史研究』24, 1986 (昭和61)年
3. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡G・H・I区』, 1986 (昭和61)年
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『下東西遺跡』, 1987 (昭和62)年
5. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』, 1987 (昭和62)年
6. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡I・J・K区』, 1988 (昭和63)年
7. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『田端遺跡』, 1988 (昭和63)年
8. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』, 1988 (昭和63)年
9. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』, 1989 (平成元年)年
10. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』, 1990 (平成2)年
11. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡L・M・N・O区』, 1990 (平成2)年
12. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『国分境遺跡』, 1990 (平成2)年
13. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『熊野堂遺跡(2)』, 1991 (平成3)年
14. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』, 1991 (平成3)年
15. 前橋市教育委員会 『国分境Ⅱ遺跡』, 1991 (平成3)年
16. 桜岡正信「7世紀代以降の土師器環の画期とその要因について」群馬土器観会『群馬考古学手帳』Vol.2, 1991 (平成3)年
17. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(6)』, 1992 (平成4)年
18. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)』, 1992 (平成4)年
19. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(8)』, 1992 (平成4)年
20. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F区』, 1992 (平成4)年
21. 前橋市教育委員会 『後二子古墳・小二子古墳』1992 (平成4)年
22. 群馬町教育委員会 『国分境Ⅲ遺跡』, 1993 (平成5)年
23. 群馬町教育委員会 『国分境Ⅳ遺跡』, 1998 (平成10)年
24. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『下東西清水上遺跡』, 1998 (平成10)年
25. 桜岡正信・神谷佳明「金属器模倣と金属器指向」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『研究紀要』15, 1998 (平成10)年
26. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 『山王廃寺～山王廃寺V遺跡発掘調査報告書～』2000 (平成12)年
27. 考古学から古代を考える会 『古代仏教系遺物集成・関東』2000 (平成12)年
28. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『高井桃ノ木Ⅲ遺跡・総集編』, 2006 (平成18)年
29. 駒澤大学考古学研究室 『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅰ』, 2007 (平成19)年

写 真 图 版



調査前現況 (西から)



調査区遠景 (南西から)



調査区全景 (垂直・上が北)



基本土層 A (東から)



基本土層 B (北から)



SI1 床面 全景 (南西から)



SI1 掘り方 全景 (南西から)



SI2 床面 全景 (南西から)



SI2 西～南部 遺物出土状況 (北西から)



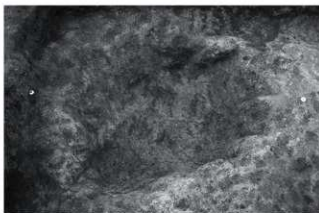
SI2 カマド 遺物出土状況 (南東から)



SI2 カマド 全景 (南西から)



SI2 カマド 断ち割り状況 (南西から)



SI2 P1 全景 (南西から)



SI2 P2 全景 (南西から)



SI2 P3 全景 (北西から)



SI2 P4 全景 (北西から)



SI2 掘り方 全景 (南西から)



SI3 床面 全景 (南西から)



SI3 カマド 全景 (南西から)



SI3 P2 全景 (南東から)



SI3 掘り方 全景 (南西から)



SI4 遺物出土状況 全景 (南東から)



SI4 南西部 遺物出土状況 (北から)



SI4 遺物№.38 出土状況 (北東から)



SI4 カマド 遺物出土状況 (南東から)



SI4 床面 全景 (南西から)



SI4 カマド 全景 (南西から)



SI4 P4 全景 (北東から)



SI4 掘り方 全景 (南西から)



SK1 全景 (西から)



SK2 全景 (北東から)



SK3 全景 (南東から)



SK4 全景 (南東から)



SK5 全景 (東から)



SK6 全景 (東から)



SK7 全景 (南から)



SK8 全景 (南から)



SK9 全景 (南から)



SK10 全景 (東から)



SD1 全景 (西から)



Pit1 全景 (西から)



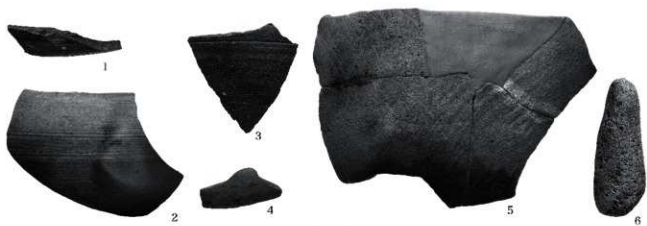
Pit2 全景 (東から)



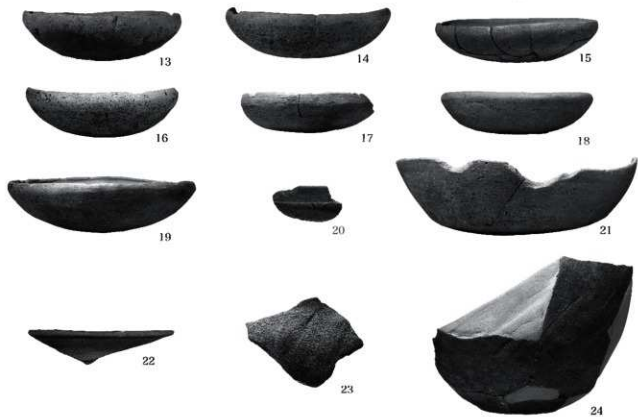
Pit3 全景 (南東から)



Pit4 全景 (北から)



S11 出土遺物



S12 出土遺物 (1)



S12 出土遺物 (2)



S13 出土遺物



S14 出土遺物 (1)



41



42



43



44



45



46



47



48

SI4 出土遺物 (2)



49

SK2 出土遺物



50

遺構外出土遺物



51

報告書抄録

フリガナ	キタハラ・ハギバヤシイセキ
書名	北原・萩林遺跡
副書名	介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第291集
編著者名	吉澤 学
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井311-1
発行年月日	2012年1月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
キタハラ・ハギバヤシイセキ 北原・萩林遺跡	高崎市中区 高崎市北原町 アザハズバヤシイセキ 字萩林169-2番地他	102024	516	36°24'16"	139°01'30"	2011.7.11 ～ 2011.8.18	約290㎡	介護施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北原・萩林遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡 4軒	土師器・須恵器 編み物石・台石	7世紀後～8世紀初 「仏鉢」出土
		古墳時代～古代	土坑 10基 溝跡 1条 ピット 4基	土師器 須恵器	
要 約		高崎市北東端部、前橋市との境界付近に位置する集落遺跡で、南側を牛池川、北側を八幡川に挟まれた台地先端付近に立地する。検出された竪穴住居跡は4軒を数え、時期は7世紀後葉が1軒、ほかは7世紀末葉～8世紀初頭に比定される。出土遺物の中には「仏鉢」や小型短頭壺といった仏教系遺物が含まれ、南東約700m程に位置する山王廃寺（7世紀第3-4半期の創建と推定）との密接な関わりが想定される。			

北原・萩林遺跡

—介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成24年1月30日 印刷

平成24年1月31日 発行

発行/医療法人関越中央病院

株式会社シン技術コンサル

高崎市教育委員会

印刷/細谷印刷株式会社